

# 並榎町 I 遺跡 2

—店舗増築に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2018

高崎市教育委員会  
株式会社 ガイア  
株式会社 ガイア・ビルド  
有限会社 毛野考古学研究所



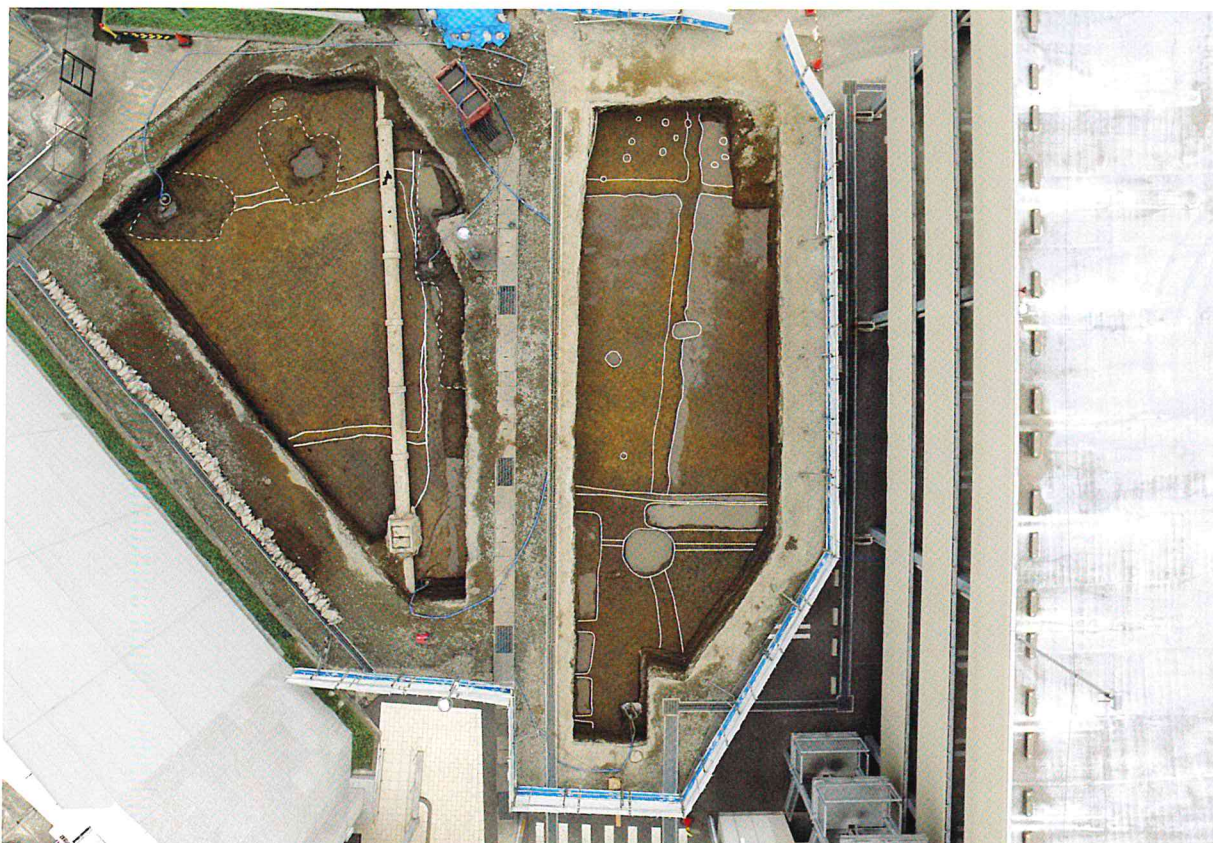


Hr-FA 泥流層下水田跡全景（上が北）

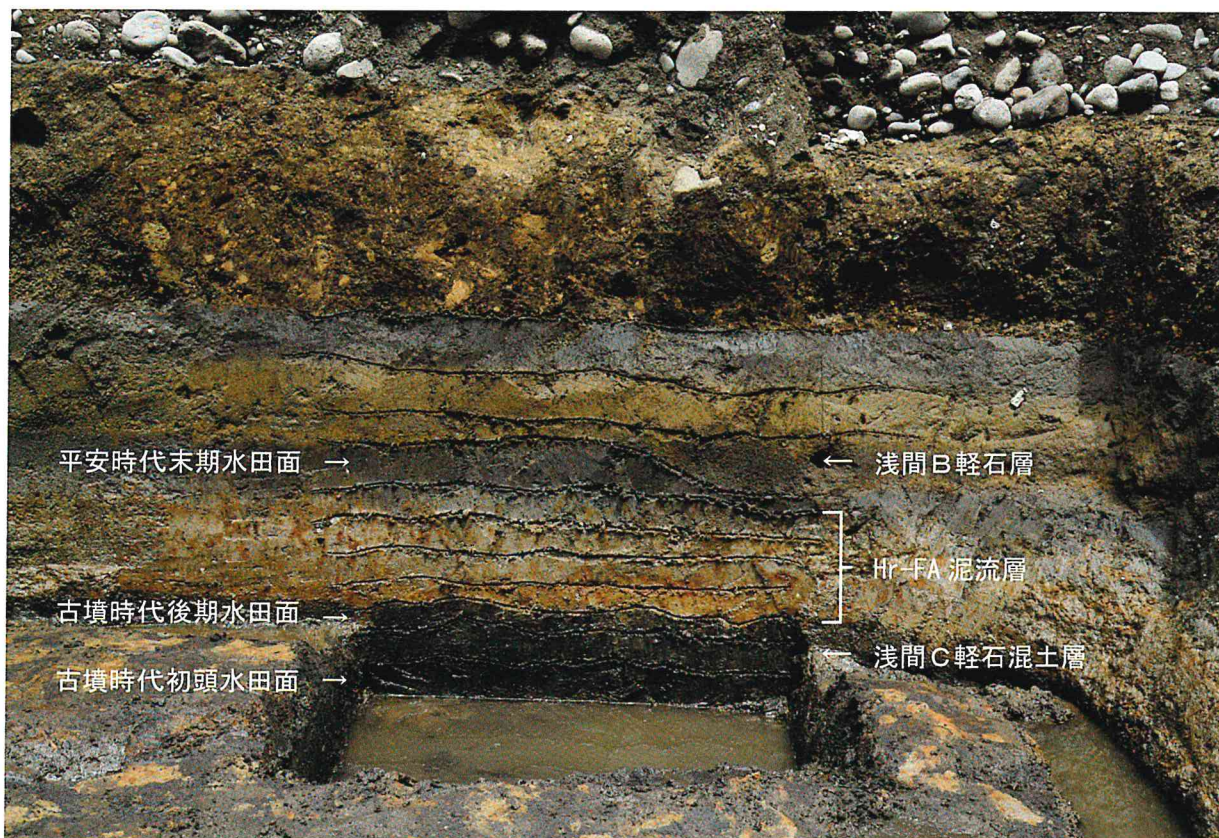


Hr-FA 泥流層下水田跡足跡検出状態（北東から）





浅間B軽石層下水田跡全景（上が北）



基本層序（南から）



## 例 言

1. 本書は、店舗増築に伴う並榎町 I 遺跡 2 の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県高崎市並榎町 4 4 番地 1 外に所在している。
3. 本調査および整理作業は、株式会社ガイア、高崎市教育委員会、有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、株式会社ガイア・ビルドに負担して頂いた。
5. 発掘調査は、伊藤順一・山本杏子（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、空撮は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が行った。整理調査は、伊藤・山本が行った。
6. 発掘調査・整理作業は平成 29 年 7 月 1 日～平成 30 年 3 月 20 日の期間で実施した。
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「703」である。
8. 本書の執筆については第 I 章を矢島浩（高崎市教育委員会）、第 II・VI 章を山本、それ以外を伊藤が行った。
9. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。

### 【発掘調査】

岡村美弥子 北野進二 久保口寛 小関泰洋 小山茂男 佐藤関雄 田村貴広 勅使川原幸枝  
萩原秀子

〔遺構測量〕 小出拓磨

### 【整理作業】

池内麻美 磯洋子 田村貴広 伴場りく 山口昌子

11. 報告書を刊行するにあたり以下の方にお世話になった。  
中島直樹

## 凡 例

1. 挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いている。
2. 遺構図および遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを付して表示した。
3. 土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006）を用いた。
4. 土層説明における含有物の量は、大量（50%以上）・多量（30～49%）・中量（15～29%）・少量（5～14%）・微量（1～4%）と表記した。
5. 本書掲載の第 1 図は高崎市発行 1/2,500 「高崎市都市計画基本図」、第 2 図は、国土地理院発行 1/20,000 地形図「長野」・「宇都宮」、第 4 図は国土地理院発行 1/25,000 地形図「高崎」を一部改変引用した。
6. 遺構略称は、水田：水田跡、溝：SD、土坑：SK、ピット：SP、As-A 復旧溝：復旧溝とした。
7. 挿図中におけるトーンは個別に図中に凡例を示した。
8. 火山噴出物の降下年代については、早田勉 1996 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告 VII』 「関東地方～東北地方南部の指標テフラの諸特徴」名古屋大学年代測定資料研究センターを参考とした。



## 目次

巻頭カラー	IV 基本層序	4
例言	V 遺構と遺物	5
凡例	1 遺跡の概要	5
目次	2 水田跡	5
図表目次	3 土坑	16
写真図版目次	4 復旧溝	17
I 調査に至る経緯	5 溝	18
II 地理的・歴史的環境	6 ピット	20
1 地理的環境	VI まとめ	21
2 歴史的環境	写真図版	
III 調査の方法と経過	報告書抄録	
1 調査の方法	奥付	
2 調査の経過概要		

## 図表目次

第1図 調査区位置図	1	第16図 As-B層下水田跡断面図	16
第2図 遺跡周辺の地形区分図	2	第17図 土坑遺構図	17
第3図 周辺の遺跡	3	第18図 復旧溝3～5遺構図	17
第4図 基本層序	4	第19図 復旧溝2・6、SD-02・03遺構図	18
第5図 調査区配置図	5	第20図 SD-01遺構図・遺物実測図	19
第6図 足跡5遺構図	6	第21図 Hr-FA泥流層下水田跡区分図	21
第7図 Hr-FA泥流層下水田跡全体図	6	第1表 足跡計測値	6
第8図 Hr-FA泥流層下水田跡西側調査区全体図	7	第2表 Hr-FA泥流層下水田跡計測値(1)	11
第9図 Hr-FA泥流層下水田跡東側調査区全体図	8	第3表 Hr-FA泥流層下水田跡計測値(2)	12
第10図 Hr-FA泥流層下水田跡断面図(1)	9	第4表 As-B層下水田跡計測値	16
第11図 Hr-FA泥流層下水田跡断面図(2)	10	第5表 土坑計測値	17
第12図 水田跡計測箇所凡例	11	第6表 復旧溝計測値	18
第13図 As-B層下水田跡全体図	13	第7表 SD-01遺物観察表	20
第14図 As-B層下水田跡西側調査区全体図	14	第8表 ピット計測値	20
第15図 As-B層下水田跡東側調査区全体図	15		

## 写真図版目次

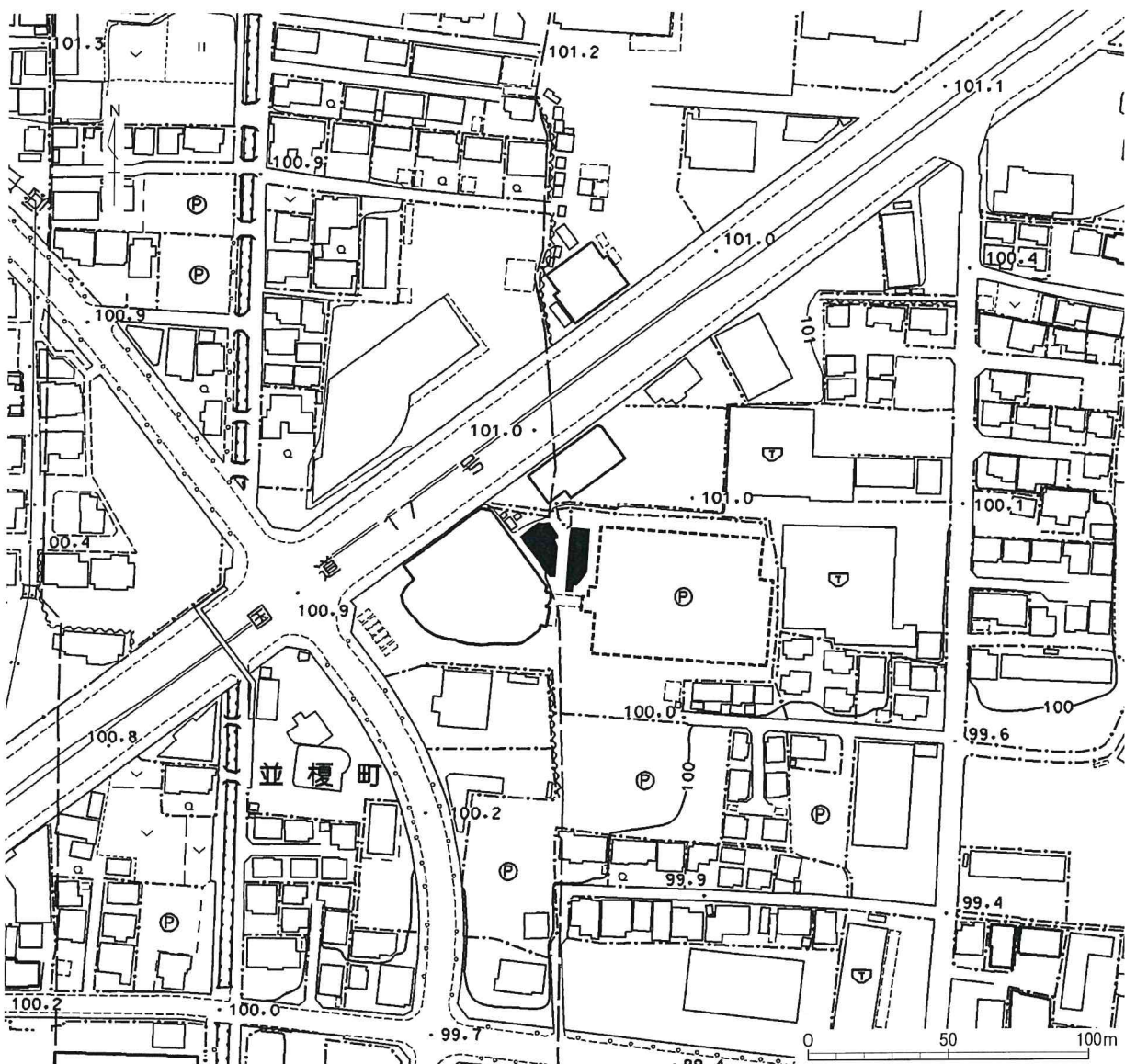
PL. 1 調査区遠景 Hr-FA泥流層下水田跡全景	PL. 4 復旧溝2～5全景 SK-02、復旧溝6、SD-01・02全景 SD-01全景
PL. 2 西側調査区Hr-FA泥流層下水田跡近景 東側調査区Hr-FA泥流層下水田跡近景 Hr-FA泥流層下水田跡水口2 Hr-FA泥流層下水田跡水口4 Hr-FA泥流層下水田跡畦畔検出状態 Hr-FA泥流層下水田跡畦畔検出状態 Hr-FA泥流層下水田跡足跡検出状態 Hr-FA泥流層下水田跡足跡検出状態	東側調査区北部ピット群全景 SD-01出土遺物
PL. 3 As-B下水田跡全景 As-B下水田跡畦畔検出状態 As-B下水田跡畦畔検出状態 SK-01全景 復旧溝1土層断面	



## I 調査に至る経緯

平成29年5月、事業者株式会社ガイアから、高崎市並榎町において計画している店舗増築に先立つ埋蔵文化財の照会が高崎市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である並榎町I遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。並榎町I遺跡において平安時代の水田跡と古墳時代の水田跡が検出されていることから開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。同年6月26日に文化財保護法に基づく届出が提出された。なお、遺跡名については「並榎町I遺跡2」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に準じ、平成29年7月1日に株式会社ガイア・ビルドと民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また同日に株式会社ガイア・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三者協定を締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督することとなった。



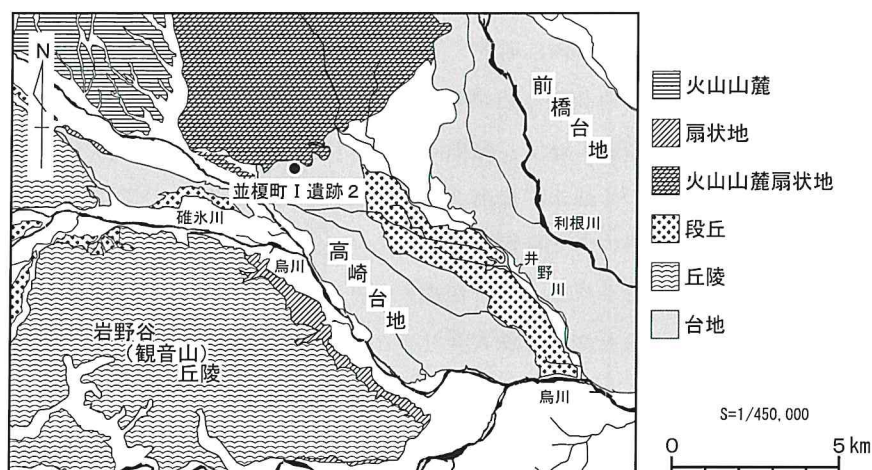
第1図 調査区位置図



## II 地理的・歴史的環境

### 1 地理的環境

並榎町 I 遺跡 (1) は、烏川と碓氷川の合流地点から北西約 2.5km に位置する。約 2 万 1000 年前、浅間山の山体崩壊に伴う前橋泥石流堆積物を土台として前橋台地が形成された。このうち、井野川低地帯から烏川左岸にかけて高崎泥流が堆積している範囲をとくに高崎台地とよぶ。本遺跡は



第 2 図 遺跡周辺の地形区分図

高崎台地の北部に位置し、周辺は微高地と烏川左岸の後背湿地および井野川右岸の低地が入り組んだ形となっている。微高地では集落が、低地では各テフラや噴火に伴う泥流に被覆された水田跡が調査されている。

### 2 歴史的環境

本遺跡周辺では、並榎北遺跡 (2) や上並榎下松遺跡 (5) など 4 世紀初頭に降下したとされている浅間 C 軽石 (As-C) の直下および As-C 混入土層水田が確認されており、弥生時代後期から古墳時代初頭にはすでに、一帯の低地部において水田化が始まっていたようである。

6 世紀初頭の降下とされる榛名山二ツ岳洪川テフラ (Hr-FA) の直下や、噴火に伴う泥流によって被覆された水田跡は、一区画およそ 10 m<sup>2</sup>以下の「ミニ水田」や「極小区画水田」とよばれるものである。本遺跡周辺における Hr-FA 直下とされている水田跡は、並榎北遺跡・並榎仲沖遺跡 (3)・並榎台原遺跡 (4)・上並榎下松遺跡・上並榎御料所遺跡 (8)・飯塚新田西遺跡 (11)・飯塚雁田遺跡 (12)・下小鳥町頭 II 遺跡 (16)・大八木富士廻り遺跡 (18)・間屋町西遺跡 (19)・芦田貝戸遺跡 (21)・御布呂遺跡 (22) で調査事例が認められる。Hr-FA 泥流層下とされている水田は、並榎北遺跡・上並榎八反田遺跡 (6)・飯塚新田西遺跡・飯塚大道東遺跡 (13)・上小埜村東 I 遺跡 (20)・芦田貝戸遺跡・御布呂遺跡・融通寺遺跡 (26) で検出されている。上記の遺跡群が分布する範囲では、Hr-FA 泥流堆積物の層厚は数十 cm～約 1 m と厚く、その後の耕作再開を困難なものにしたようである。被害の少ない地域では水田の復旧が行われたが、6 世紀中頃には再度榛名山が噴火し甚大な被害を被ることになる。この噴火に伴い降下した榛名山二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP) によって被覆された水田跡については上並榎御料所遺跡 II・芦田貝戸遺跡・御布呂遺跡などで確認されている。当該期の集落としては、並榎台原遺跡・上並榎屋敷前遺跡 (10) で石製模造品の工房を伴う 6 世紀後半の集落が調査されている。また、周辺には舟形石棺をもつ 5 世紀後半の前方後円墳である上並榎稲荷山古墳 (7)、6 世紀前半の上小埜稲荷山古墳 (25)、6 世紀後半の筑縄小星山古墳 (24) が位置することから、これらの水田・集落を営んだ人々と被葬者との関係性も考えられよう。

天仁元 (1108) 年の浅間山の大规模な噴火に伴う浅間 B 軽石 (As-B) の降灰は上野国に大きな被害を及ぼし、



律令制の崩壊を促進させた。11～12世紀に記されたとされる『中右記』に上野国は「亡弊国」と記されておりその荒廃状況がうかがい知れる。本遺跡周辺におけるAs-B直下の水田跡としては、本遺跡・並榎北遺跡・並榎仲沖遺跡・上並榎下松遺跡・上並榎八反田遺跡・上並榎御料所遺跡・飯塚新田西遺跡・飯塚雁田Ⅱ遺跡・飯塚大道東遺跡・飯塚西金井遺跡（14）・下小鳥町遺跡（15）・大八木水田遺跡（17）・芦田貝戸遺跡・筑縄遺跡群（23）・昭和町Ⅰ遺跡（27）・飯塚東金井Ⅱ遺跡（28）と非常に多くの調査事例がある。これらの水田跡では、条里制地割に沿って配置された畦畔が検出されている。周辺における平安期の集落としては、上並榎南遺跡（9）・下小鳥町遺跡で調査が行われている。



- 1 並榎町Ⅰ遺跡 2 並榎北遺跡 3 並榎仲沖遺跡 4 並榎台原遺跡 5 上並榎下松遺跡 6 上並榎八反田遺跡 7 上並榎稲荷山古墳 8 上並榎御料所遺跡 9 上並榎南遺跡 10 上並榎屋敷前遺跡 11 飯塚新田西遺跡 12 飯塚雁田遺跡 13 飯塚大道東遺跡 14 飯塚西金井遺跡 15 下小鳥町遺跡 16 下小鳥町頭Ⅱ遺跡 17 大八木水田遺跡 18 大八木富士廻り遺跡 19 間屋町西遺跡 20 上小橋村東Ⅰ遺跡 21 芦田貝戸遺跡 22 御布呂遺跡 23 筑縄遺跡群 24 筑縄小星山古墳 25 上小橋稲荷山古墳 26 融通寺遺跡 27 昭和町Ⅰ遺跡 28 飯塚東金井Ⅱ遺跡

第3図 周辺の遺跡

【引用・参考文献】

齋藤英敏 2001 「小区画水田・極小区画水田の構造—群馬の水田跡から見た古代東アジア—」『研究紀要』19 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
『新編 高崎市史 通史編1 原始古代』2003 高崎市史編さん委員会  
『新編 高崎市史 資料編2 原始古代Ⅱ』2000 高崎市史編さん委員会



### Ⅲ 調査の方法と経過

#### 1 調査の方法

表土除去は、0.25 m<sup>3</sup>バックホーを用いて行った。それぞれ表土除去後、人力による遺構検出および遺構掘削を行った。遺構掘削は、水田面を被覆している As-B（浅間 B 軽石・1108 年降下）及び Hr-FA（榛名二ツ岳渋川テフラ・6 世紀初頭降下）を鋤簾・移植ごてを用いて除去した。

遺構測量は、トータルステーションおよび電子平板を用い、平面図および断面図を作成した。座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、調査の進捗状況に応じて行い、35mm モノクロ・35mm カラーリバーサル・デジタルカメラ（1,200 万画素相当）を使用した。

遺物接合は、溶剤系接着剤（セメダイン C）を用い、エポキシ系樹脂で部分的に補強した。遺物の写真撮影は、センサーサイズ APS-C のものを使用した（Nikon D7000）。遺構・遺物トレース、写真加工、版組はそれぞれ Adobe IllustratorCS2、Adobe PhotoshopCS2、Adobe InDesignCS2 を使用した。

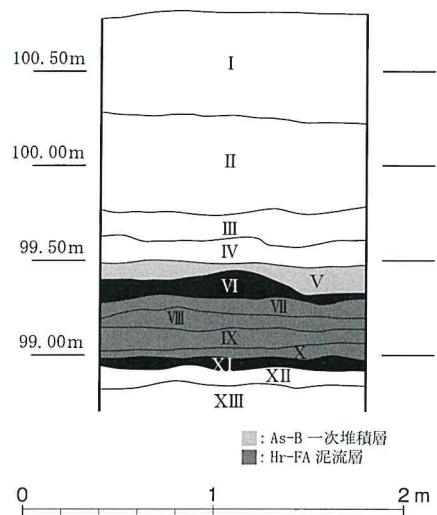
#### 2 調査の経過概要

現地での発掘調査は 2017 年 7 月 18 日～2017 年 9 月 30 日まで行った。

7 月 18 日：安全柵の設置。仮設トイレ・プレハブ・発掘機材を搬入する。アスファルト撤去作業を行う。19 日：西側調査区の As-B 層下水田跡の調査に着手する。20 日：人力による掘削を開始する。21 日：遺構測量基準点の設置を行う。25 日：西側調査区 As-B 層下水田跡の空撮を行う。遺構測量を実施する。26 日：西側調査区の Hr-FA 泥流層下水田跡の調査に着手する。8 月 1 日：西側調査区の Hr-FA 泥流層下水田跡の空撮を行う。遺構測量を実施する。3 日：東側調査区の As-B 層下水田跡の調査に着手する。10 日：東側調査区の As-B 下水田跡の空撮を行う。遺構測量を実施する。17 日：東側調査区の Hr-FA 泥流層下水田跡の調査に着手する。24 日：東側調査区の Hr-FA 泥流層下水田跡の空撮を行う。遺構測量を実施する。高崎市教育委員会による完了検査を行う。26 日：発掘機材を撤収する。28 日：プレハブを撤収する。9 月 25 日：地盤改良及び重機による埋戻しを実施する。30 日：埋戻しを終了する。

### Ⅳ 基本層序

調査区北側で基本層序を確認した。第 I 層は碎石層、第 II 層は客土で現代の盛り土である。第 III 層は褐灰色土層で As-A（浅間 A 軽石・1783 年降下）を多量に含む。第 IV 層は褐色土層で As-B を少量含む。第 V 層は As-B 一次堆積層である。第 VI 層は As-B に被覆された水田土壌である。第 VII～X 層は Hr-FA 泥流層である。第 VII 層は灰白色土層で Hr-FA の噴火に伴う軽石を微量含む。第 VIII 層はにぶい黄橙色土層で砂質土のラミナ状堆積が認められるほか、少量の炭化物を含む。第 IX 層はにぶい黄橙色シルト層で第 VII 層と同様の軽石を少量含む。第 X 層はにぶい黄橙色シルト層で砂を多量に含む。第 XI 層は Hr-FA 泥流層に被覆された水田土壌である。第 XII 層は黒褐色土で As-C（浅間 C 軽石・3 世紀後半降下）を多量に含む。第 XIII 層は黒色土で第 XII 層に被覆された水田土壌と考えられる。



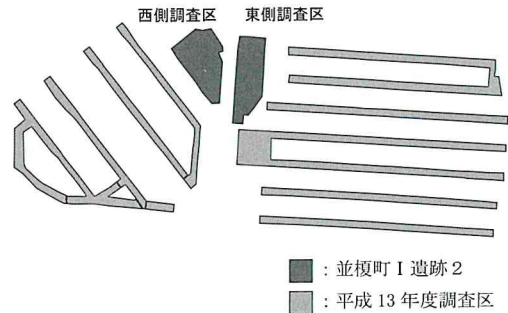
第 4 図 基本層序



## V 遺構と遺物

### 1 遺跡の概要

今回の調査では、Hr-FA 泥流層に被覆された古墳時代後期初頭の水田跡、As-B 層に被覆された平安時代末期の水田跡、中世・近世に帰属すると考えられる土坑、溝、ピット、As-A 復旧溝が検出された。本調査区の東西に接する箇所では平成 13 年度に調査が実施されており（2002 並榎町 I 遺跡）、同様の調査結果が得られている。調査区は北西から南東方向に向かいわずかに傾斜が認められた。水田区画は Hr-FA 泥流層に被覆された水田跡では 79 区画を確認した。今回検出された水田区画はいわゆる極小区画水田であり、大区画に伴う大畦畔の検出には至らなかった。水田面には無数の足跡が検出された。足跡には規則的な歩行列などは見られず、畦畔を破壊している状態を示すものも認められた。As-B 層に被覆された水田は西側では畦畔の遺存状態が不良であったのに対して東側では良好に確認された。



第 5 図 調査区配置図

なお、調査箇所の中央には現況で使用されている排水溝が付設されていたことから、調査区を東西に分けて調査を行った。調査区の呼称については、それぞれ東側調査区・西側調査区（第 5 図）とする。

### 2 水田跡

#### As-C 混土層下水田跡（第 4 図）

東側調査区北側で層位確認のためのトレンチ調査を行った結果、層厚 10 cm 程の As-C が多量に混入した層位（As-C 混土層、基本層序第 X II 層）を確認した。As-C 混土層直下では非常に粘性の強い水田土壌と思われる黒色の粘質土が認められた。部分的な調査のため詳細は不明であるが、As-C の一次堆積層は検出されていない点、As-C が攪拌を受けて黒褐色土と混ざり合っている点から、当地が As-C 降下以降に何らかの攪拌を受けている可能性が考慮される。以上のことを勘案すると As-C 混土層を覆土とする水田跡が存在する可能性が想定される。

#### Hr-FA 泥流層下水田跡（第 6～12 図、第 1～3 表／PL. 1・2）

**重複：**SK-02 と重複し、切り合い関係及び覆土から本遺構が古い。西側調査区ではカクランによる削平が認められた。

**残存状態：**検出された水田は全体を層厚 30～40 cm ほどの Hr-FA 泥流層で覆われており、畦畔及び水田面の残存状態は良好であった。

**地形：**水田面の標高値は 98.90～99.00 m を測り比高差は最大で 10 cm を測る。比高差の推移に方向性は認められないことからほぼ平坦であったと考えられる。

**区画：**79 区画が確認された。そのうち、全容を把握できるのは 16 区画（13・14・18・19・26・31・34・38・46・52・53・57～59・64・74）である。全容を把握できた水田区画のうち、面積の最小値は区画 52 の 2.43 m<sup>2</sup>、

最大値は、区画 19 の 5.20 m<sup>2</sup> である。平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈する。

**畦畔**：畦畔の走行方向は調査した範囲においてはほぼ同様の走行方向を示す。走行方向はそれぞれ、北西－南東畦畔が N－33°－W、北東－南西畦畔が N－48°－E を指す。水田面と畦畔の比高差は 0～8 cm を測る。

**水口**：7 箇所検出された（水口 1～7）。検出された水口は全て北西－南東方向の畦畔に設けられていた。また、水口の設置箇所には差が認められた。水口 1 は区画 18 の北西端、水口 2・6・7 はそれぞれ区画 26・60・5 の北西寄り、水口 3 は区画 9 の中央、水口 4・5 はそれぞれ区画 45・53 の南西寄りに設置されていた。

**水田耕作土**：黒褐色土で、粘性が非常に強い。As-C を少量含む。層厚は 6～8 cm ほどである。

**水田面の状態**：検出された水田面の全域に人間の足跡とみられる痕跡が検出された。指先の方向は様々であり規則的な歩行列などは認められず、多くが重複する状況であった。足跡の検出は水田面に限らず畦畔上でも検出され、明らかに畦畔を破壊している状態を示すものもあった。これらの足跡は、検出時に指の形が確認されたものもあることから素足で歩行していたことが推測される。調査時に 5 箇所の足跡について計測を行った。計測値には差が認められることから、複数の人間によるものである可能性が考えられる。

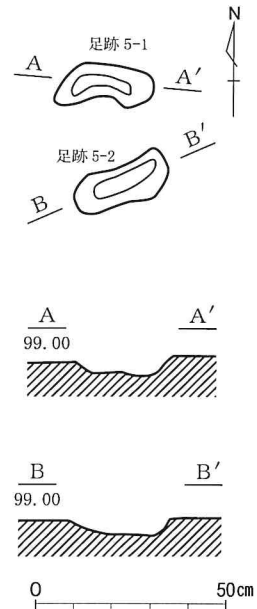
なお足跡 5 については同一人物のものと考えられる左右の足跡が検出された。

**遺物**：遺物は出土しなかった。

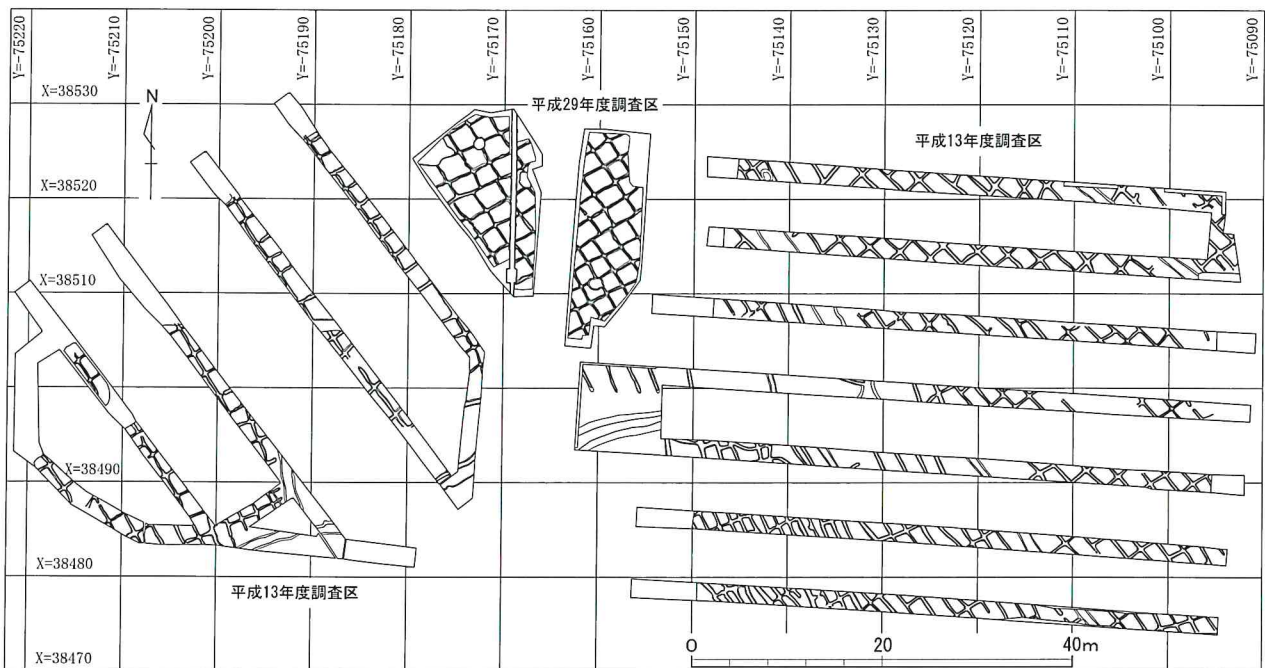
**時期**：水田面全域が Hr-FA 泥流層に被覆されていたことから古墳時代後期に帰属すると考えられる。

番号	長径	短径	深さ
足跡 1	21.0	9.0	3.0
足跡 2	24.0	12.0	5.0
足跡 3	22.0	10.0	5.0
足跡 4	21.0	9.0	4.0
足跡 5-1	26.0	10.0	5.0
足跡 5-2	27.0	9.0	4.0

第 1 表 足跡計測値

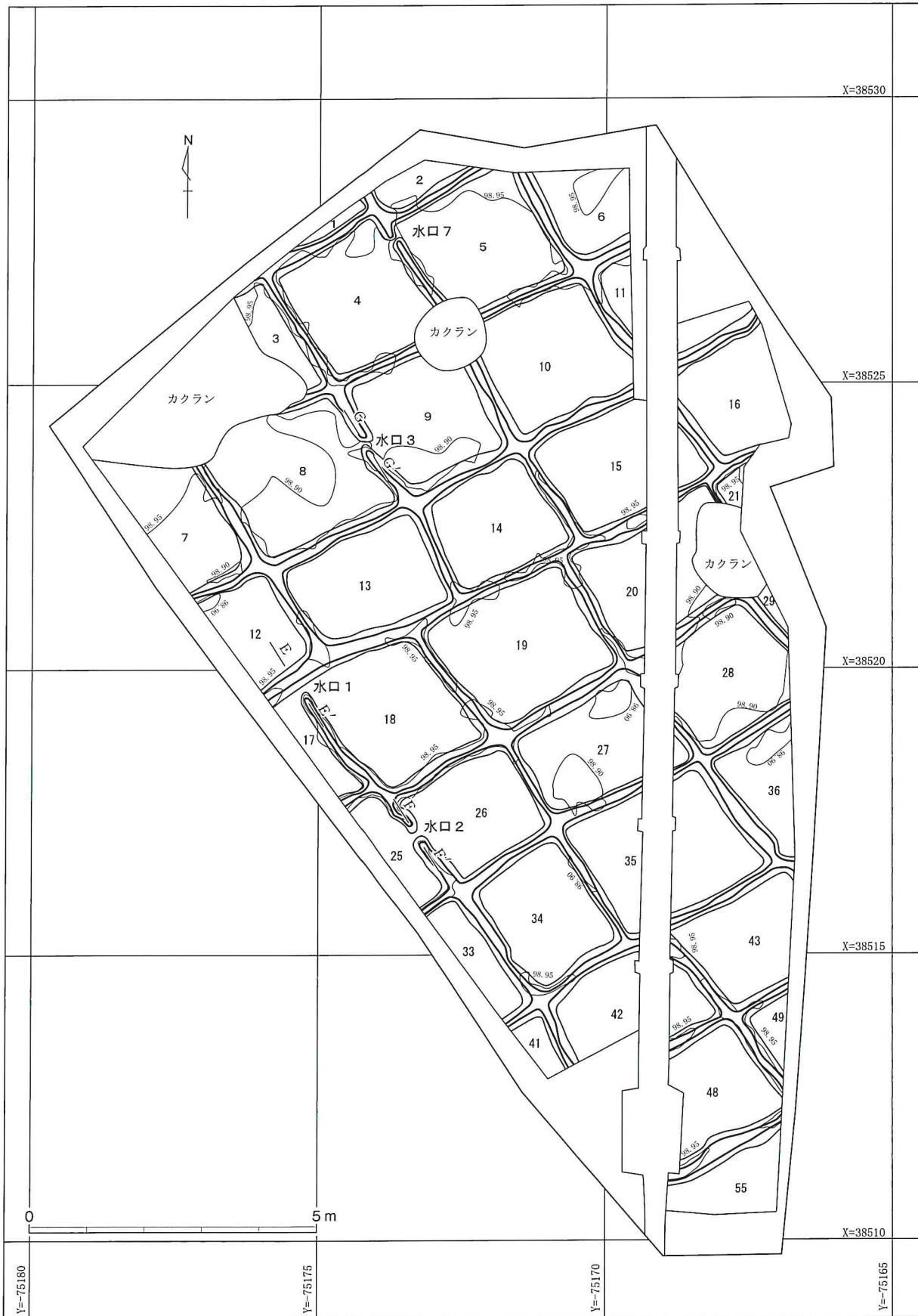


第 6 図 足跡 5 遺構図

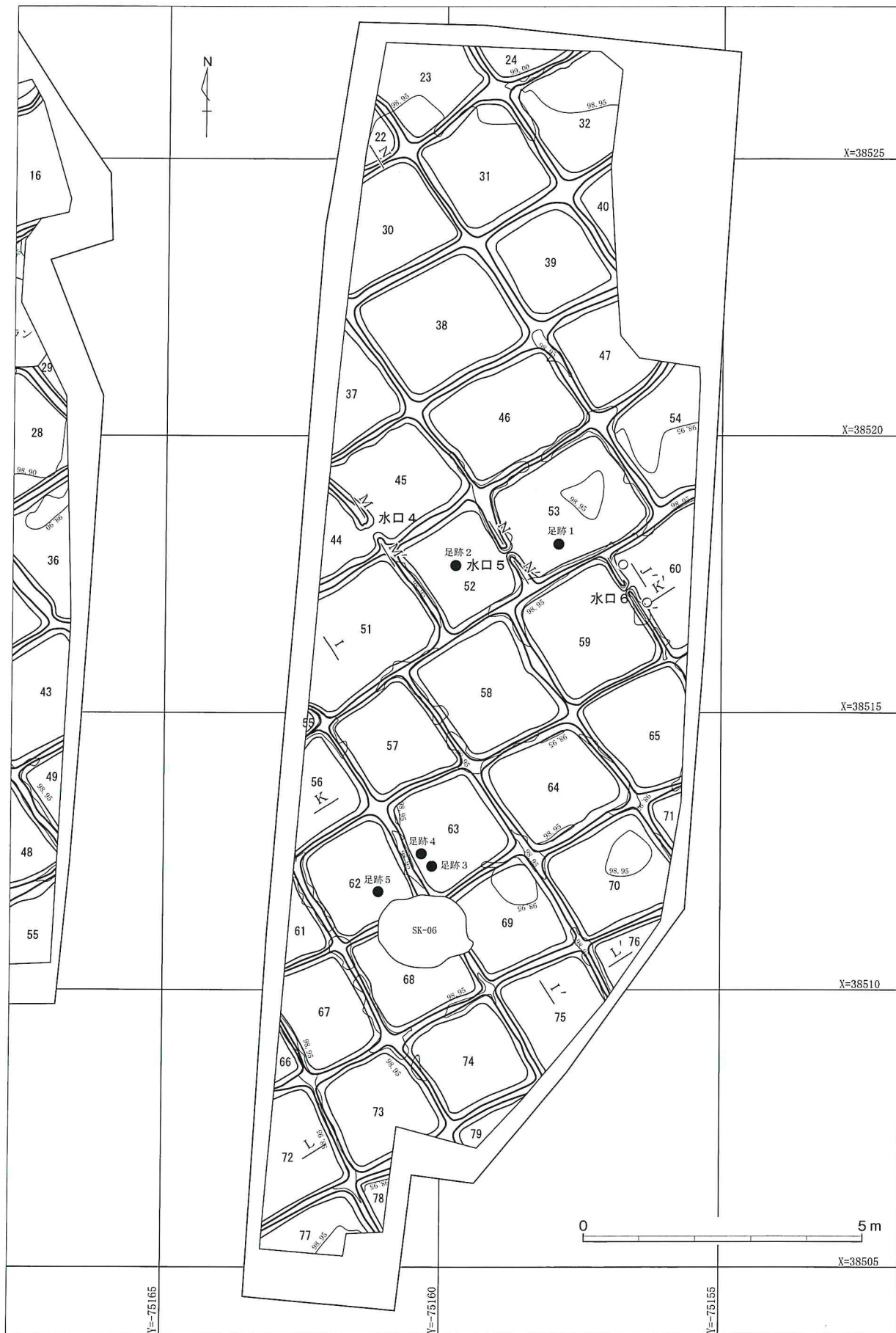


第 7 図 Hr-FA 泥流層下水田跡全体図



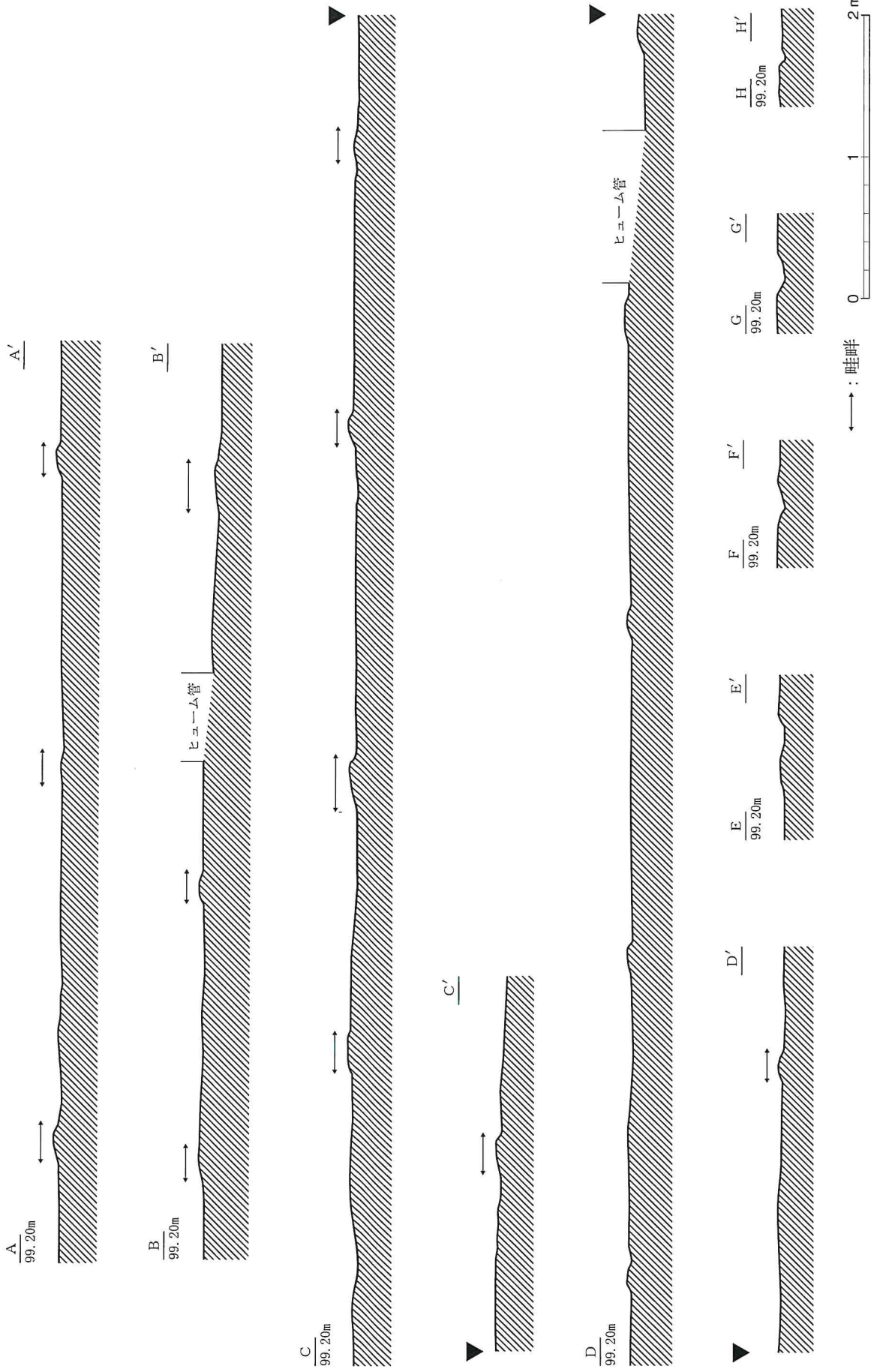


第 8 図 Hr-FA 泥流層下水田跡西側調査区全体図

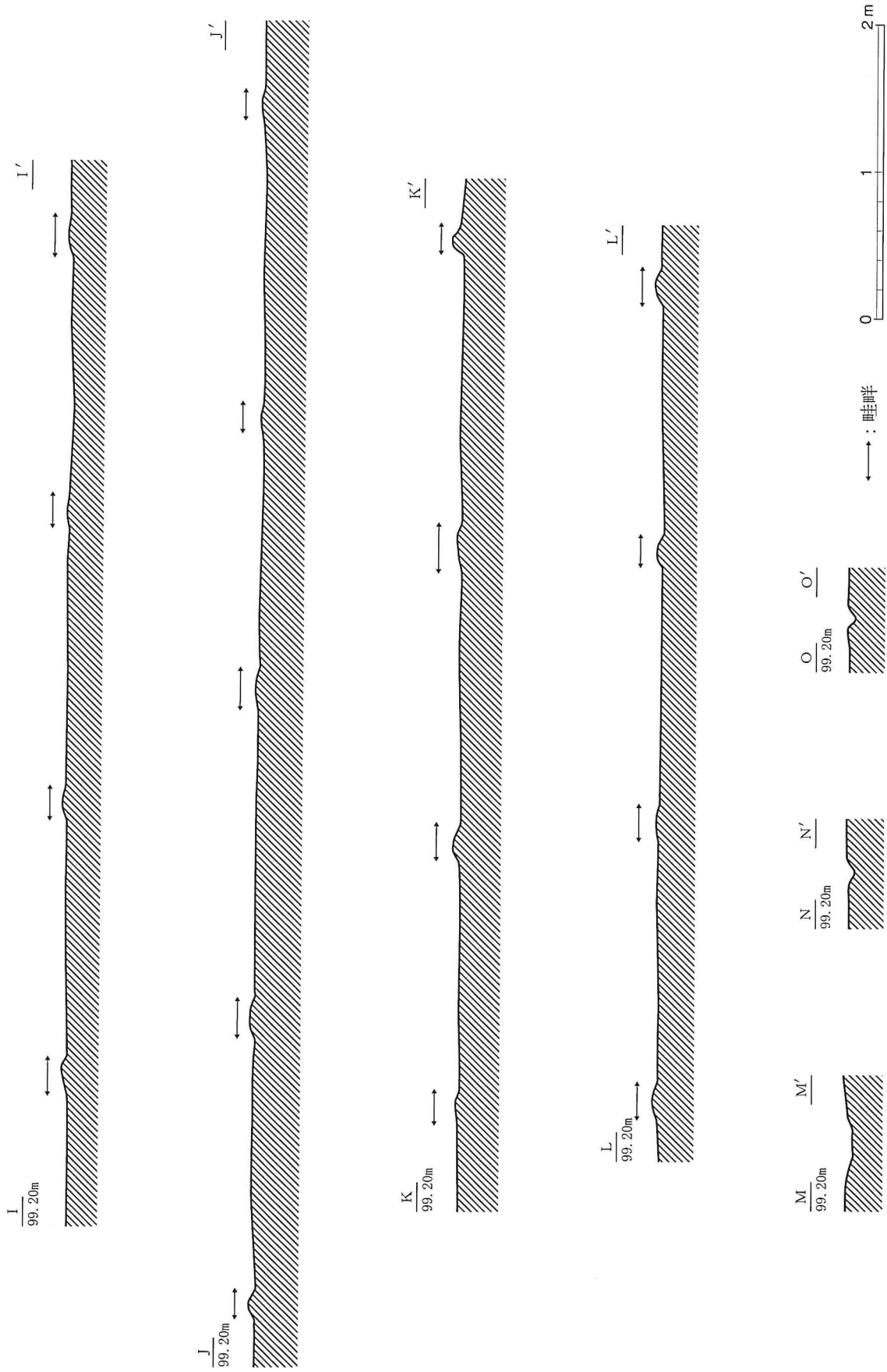


第9図 Hr-FA 泥流層下水田跡東側調査区全体図





第10図 Hr-FA 泥流層下水田跡断面図 (1)

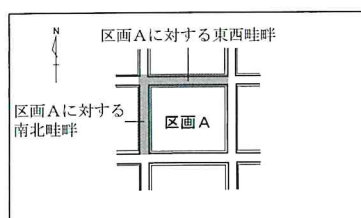


第 11 图 Hr-FA 泥流層下水田跡断面图 (2)



区画 No.	面積 (㎡)	北西-南東軸 (m)	北東-南西軸 (m)	田面中央標高 (m)	田面比高 (cm)	北西-南東畦畔高 (cm)	北西-南東畦畔幅 (cm)	北東-南西畦畔高 (cm)	北東-南西畦畔幅 (cm)	備考
1	(0.18)	—	—	(98.97)	(0)	—	—	—	—	
2	(0.67)	—	—	(98.97)	(1)	(1)	(25~27)	—	—	
3	(1.00)	2.05	—	(98.93)	(2)	(3)	—	—	—	
4	(4.18)	2.16	2.01	98.95	(3)	2~3	24~26	(1~2)	(14~32)	
5	(4.27)	2.06	2.16	98.94	(3)	(2~6)	(18~23)	(2~4)	(16~25)	
6	(1.91)	—	—	(98.94)	(3)	(1~2)	(19~34)	—	—	
7	(3.08)	—	—	(98.94)	(7)	—	—	—	—	
8	(5.37)	2.18	2.39	98.92	(5)	(2~6)	(20~34)	(4~6)	(23~24)	
9	(3.66)	2.02	1.96	98.93	(6)	3~6	26~50	(3~5)	(22~26)	水口3:幅9cm
10	(4.46)	2.07	2.20	98.93	(3)	(1)	(30~57)	(1~3)	(19~29)	
11	(0.99)	—	—	(98.90)	(5)	(0~2)	(25~44)	(3)	(30~42)	
12	(2.00)	1.73	—	(98.91)	(3)	—	—	(0~1)	(21~48)	
13	3.80	1.65	2.41	98.92	3	3~4	23~30	2~4	23~31	
14	3.34	1.77	1.94	98.94	4	0	23~37	1~3	22~42	
15	(3.40)	1.80	2.39	98.94	(3)	1~4	21~28	(0~1)	(20~35)	
16	(2.87)	1.78	—	(98.93)	(3)	(0~1)	(27~31)	(0~4)	(24~30)	
17	(0.82)	1.95	—	(98.94)	(1)	—	—	(2)	(35~38)	
18	4.45	2.27	2.06	98.95	2	4~5	20~31	1	32~42	水口1:幅9cm
19	5.20	2.13	2.51	98.93	3	1~5	17~31	0~4	20~36	
20	(2.53)	1.96	2.66	(98.92)	(2)	3~6	19~31	(1~6)	(26~36)	
21	(0.23)	—	—	(98.90)	(0)	(1)	(11~13)	(2)	(23~27)	
22	(0.31)	—	—	(98.93)	(1)	—	—	—	—	
23	(2.19)	—	1.67	98.95	(6)	(1)	(21~24)	—	—	
24	(0.52)	—	—	(98.97)	(1)	(2)	(21~26)	—	—	
25	(1.18)	2.08	—	(98.91)	(1)	—	—	(6)	(17~31)	水口2:幅8cm
26	3.20	1.72	1.94	98.93	1	3~4	21~34	4~6	24~32	
27	(3.36)	1.56	2.25	98.90	(3)	4	15~20	4~6	27~35	
28	(3.52)	1.87	2.18	98.88	(4)	(2~5)	(23~27)	(2~4)	(27~28)	
29	(0.14)	—	—	(98.86)	(0)	(3)	(21~28)	—	—	
30	(2.68)	1.65	—	98.91	(2)	—	—	(2)	(19~21)	
31	3.07	1.79	1.71	98.93	5	2~3	17~22	1~2	20~30	
32	(2.76)	1.81	—	(98.95)	(6)	0~4	23~28	(2~8)	(18~25)	
33	(1.23)	2.23	—	(98.94)	(1)	—	—	(4)	(16~18)	
34	3.41	2.02	1.65	98.94	3	1	20~37	1~2	21~30	
35	(4.21)	2.10	2.50	(98.92)	(4)	1	16~24	(3~5)	(15~31)	
36	(1.82)	—	—	(98.92)	(4)	2~4	27~39	(3~5)	(21~27)	
37	(1.42)	—	—	(98.92)	(2)	—	—	—	—	
38	4.41	1.87	2.31	98.92	2	(0~0)	(21~35)	0~2	25~28	
39	2.43	1.62	1.51	98.93	2	1~4	28~40	0~2	32~44	
40	(0.48)	—	—	(98.93)	(1)	(1)	(24~30)	(1~2)	(22~30)	
41	(0.48)	—	—	(98.92)	(1)	—	—	(0)	(25~30)	

第2表 Hr-FA 泥流層下水田跡計測値(1)



- ・面積は畦畔下端の範囲、田面比高は同一区画内の最大値、畦畔高は田面と畦畔の比高を示す。
  - ・各区画の畦畔については、南北畦畔は区画の西側、東西畦畔は区画の北側に位置するものを指す。畦畔の軸長・幅は水田面と接する下端で計測した。
- (有山径世ほか 2011『南部拠点地区遺跡群 No. 6』を一部改編)

第12図 水田跡計測箇所凡例

区画 No.	面積 (㎡)	北西-南東軸 (m)	北東-南西軸 (m)	田面中央標高 (m)	田面比高 (cm)	北西-南東 畦畔高 (cm)	北西-南東 畦畔幅 (cm)	北東-南西 畦畔高 (cm)	北東-南西 畦畔幅 (cm)	備 考
42	(2.39)	1.61	2.38	(98.93)	(3)	(1~2)	(25~27)	(1~2)	(25~34)	
43	(2.90)	1.61	2.27	98.95	(4)	(0~8)	(26~30)	(1~2)	(20~24)	
44	(0.79)	—	—	(98.93)	(1)	—	—	—	—	
45	(2.75)	1.56	1.68	(98.92)	(2)	(1~2)	(22~32)	(0~3)	(16~27)	水口4:幅14cm
46	3.66	1.60	2.28	98.93	4	2~3	22~29	0~4	27~36	
47	(1.88)	1.59	—	(98.93)	(2)	1~2	19~30	(1~2)	(29~38)	
48	(2.64)	1.71	—	(98.93)	(3)	—	—	(3)	(18~31)	
49	(0.47)	—	—	(98.93)	(1)	(3~5)	(30~32)	(2)	(23~28)	
50	(0.03)	—	—	(98.93)	(0)	—	—	—	—	
51	(3.72)	1.69	—	98.93	(2)	(2)	(18~22)	(2~3)	(19~31)	
52	2.43	1.63	1.42	98.92	3	2~4	25~29	0~3	25~35	
53	4.19	1.81	2.40	98.93	3	2~4	22~32	2~3	19~30	水口5:幅1cm以下
54	(2.48)	1.75	—	(98.95)	(4)	1~4	20~30	(1~3)	(23~33)	
55	(1.72)	—	—	(98.94)	(3)	—	—	(0~3)	(29~50)	
56	(1.35)	1.43	—	(98.94)	(2)	—	—	(3)	(15~16)	
57	2.52	1.65	1.53	98.93	2	0~3	23~31	1~6	19~25	
58	3.45	1.96	1.63	98.94	2	3~5	23~30	2~6	23~29	
59	3.54	1.95	1.80	98.95	3	1~4	22~39	4~6	22~30	
60	(2.08)	2.03	—	(98.93)	(3)	4~7	17~20	(3~6)	(20~32)	水口6:幅1cm以下
61	(0.57)	—	—	(98.93)	(2)	—	—	—	—	
62	(2.42)	1.53	1.66	98.90	(2)	(4~6)	(23~28)	0~2	20~23	
63	2.69	1.70	1.59	98.90	3	(3~4)	(26~30)	2~3	19~24	
64	2.95	1.62	1.85	98.91	2	3~6	25~36	(5)	20~30	
65	(2.72)	1.70	1.82	98.93	(3)	2~4	23~29	5~6	13~18	
66	(0.20)	—	—	(98.93)	(1)	—	—	—	—	
67	(2.21)	1.75	1.30	98.93	(2)	(2~4)	(17~20)	(3~5)	(18~22)	
68	(1.85)	1.64	1.73	98.93	(4)	3~6	18~34	(0~1)	(17~23)	
69	(2.44)	1.57	1.61	98.91	(5)	(2~4)	(23~25)	(0~3)	(23~33)	
70	(2.98)	1.57	1.88	98.90	(3)	4~6	22~33	1~6	23~37	
71	(0.27)	—	—	(98.92)	(0)	(2~4)	(23~28)	(2~6)	(24~30)	
72	(2.07)	1.80	—	(98.91)	(3)	—	—	(1~3)	(25~33)	
73	(2.49)	1.65	1.61	98.92	(3)	2~3	22~25	0~3	20~33	
74	2.47	1.52	1.58	98.93	3	3~5	21~25	0~4	24~33	
75	(2.10)	—	1.52	(98.92)	(2)	(4)	(20~28)	2~3	23~28	
76	(0.57)	—	—	(98.94)	(1)	(3)	(24~26)	(0)	(17~23)	
77	(1.19)	—	—	(98.91)	(3)	—	—	(1~5)	(19~32)	
78	(0.27)	—	—	(98.92)	(1)	(2~5)	(26~33)	(6)	(26~32)	
79	(0.31)	—	—	(98.91)	(0)	—	—	(3~4)	(24~27)	

第3表 Hr-FA 泥流層下水田跡計測値(2)



As-B 層下水田跡（第 13 ～ 16 図・第 4 表／ PL. 3）

重複：SK - 01・02、SD - 01 ～ 03、復旧溝 2 ～ 6、SP - 1 ～ 17 と重複し、切り合い関係から本遺構が最も古い。また、西側調査区北側及び東側ではカクランによる削平が認められた。

残存状態：検出範囲の全域が層厚 4.0 ～ 20.0 cm ほどの As-B 一次堆積層により被覆されていた。畦畔の頂部は削平される部分があるが、水田面は良好に残存していた。

地形：区画 5・7 の南北畦畔を境に水田面が一段低くなる状況が認められた。田面中央部における標高の最高位は区画 1 の 99.49 m、最低位は区画 5 の 99.33 m である。

区画：7 区画が確認された。すべての区画において調査区外に範囲が及ぶため、全容を把握できるものはなかった。平面形は平成 13 年度調査区を勘案すると長方形を呈していたと思われる。

畦畔：今回の調査では大畦畔は検出されなかった。畦畔は西側調査区では残存状態が不良であったのに対して東側調査区では良好であった。走行方向は南北畦畔が  $N - 7^{\circ} - E$ 、東西畦畔は  $N - 96^{\circ} - E$  である。南北畦畔については調査区南側で走行方向が西側に傾き、 $N - 10^{\circ} - W$  を指す。また、区画 7 の南北畦畔・東西畦畔、区画 6 の東西畦畔の脇には畝立ての痕跡と考えられる浅い溝状の掘り込みが認められた。

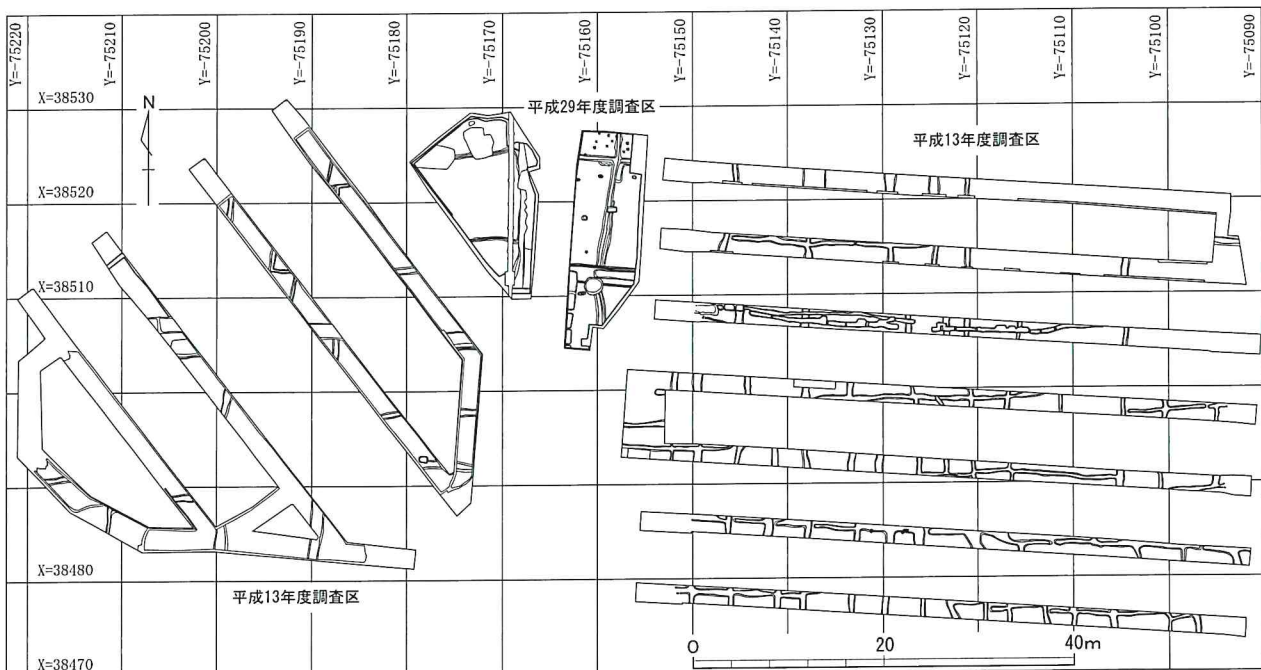
水口：調査した範囲において水口は検出されなかった。

水田耕作土：黒褐色土で粘性が非常に強い。Hr-FA に伴う軽石を微量含む。層厚は 6.0 ～ 12.0 cm である。

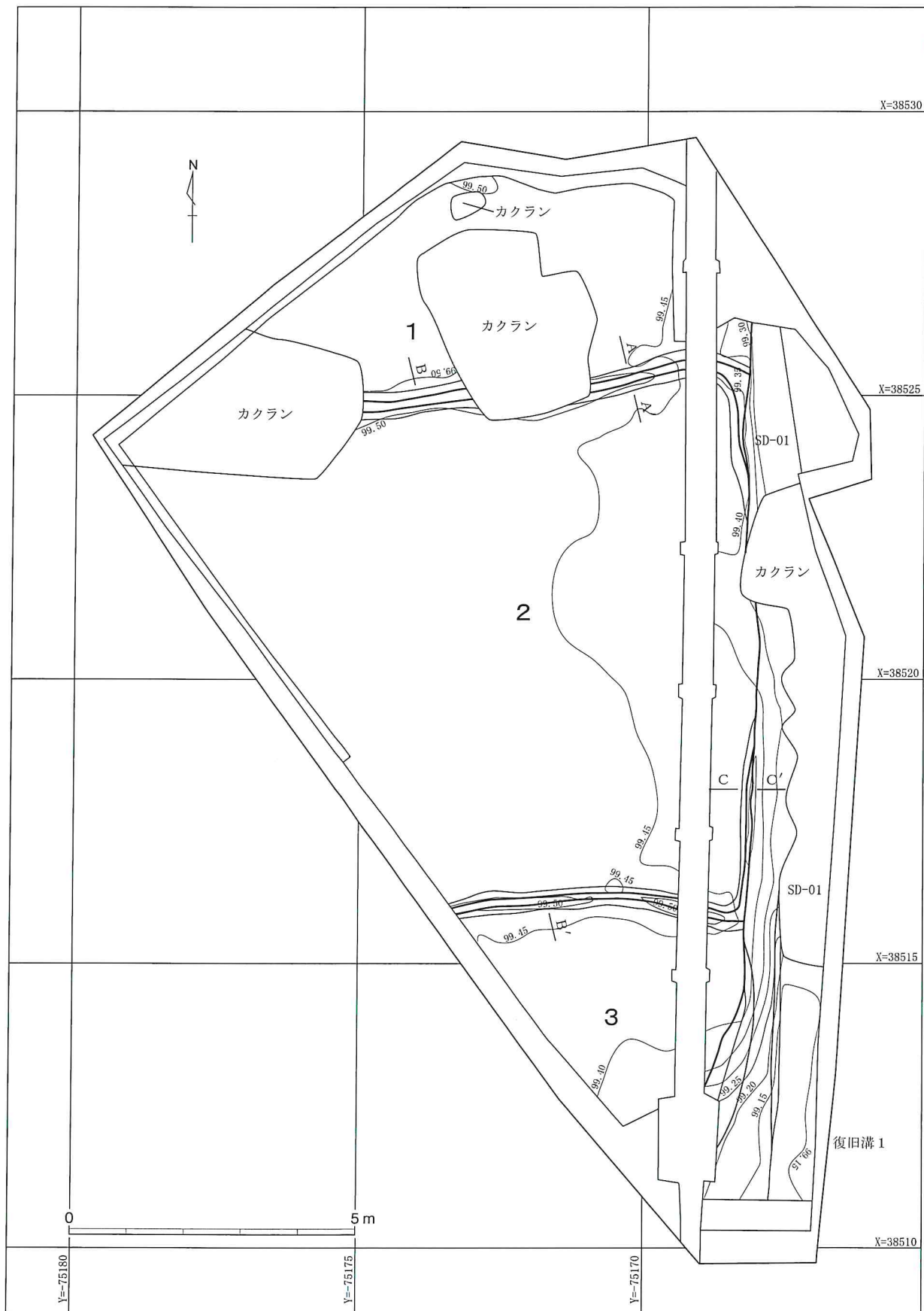
水田面の状態：東側調査区はほぼ平坦であるのに対して、西側調査区ではやや凹凸が認められ荒れた状態であった。この水田面の状態は畦畔の残存状態と関連するものと思われる。

遺物：出土しなかった。

時期：水田面が As-B 層に被覆されていたことから、平安時代末期に帰属する水田跡と考えられる。

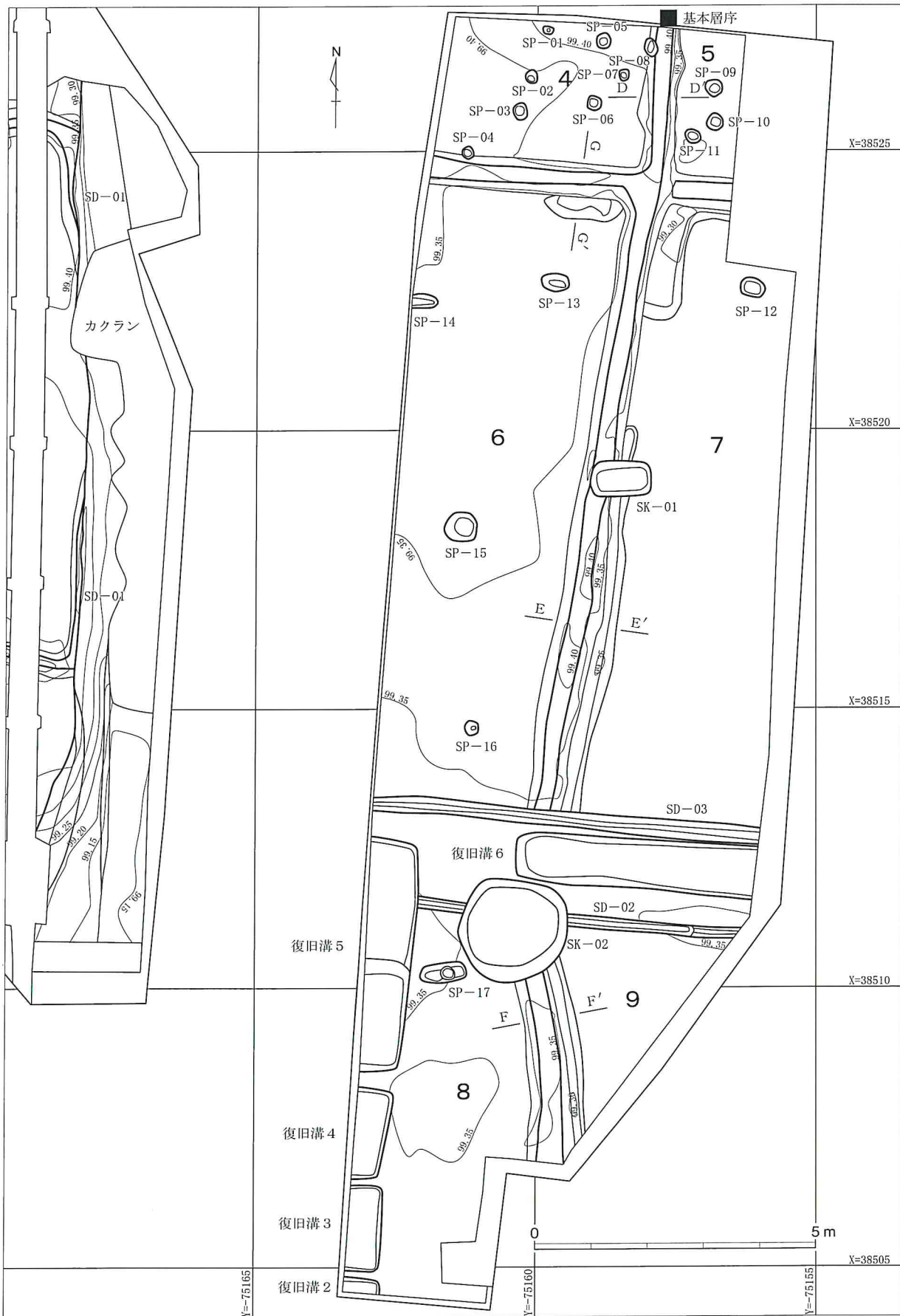


第 13 図 As-B 層下水田跡全体図

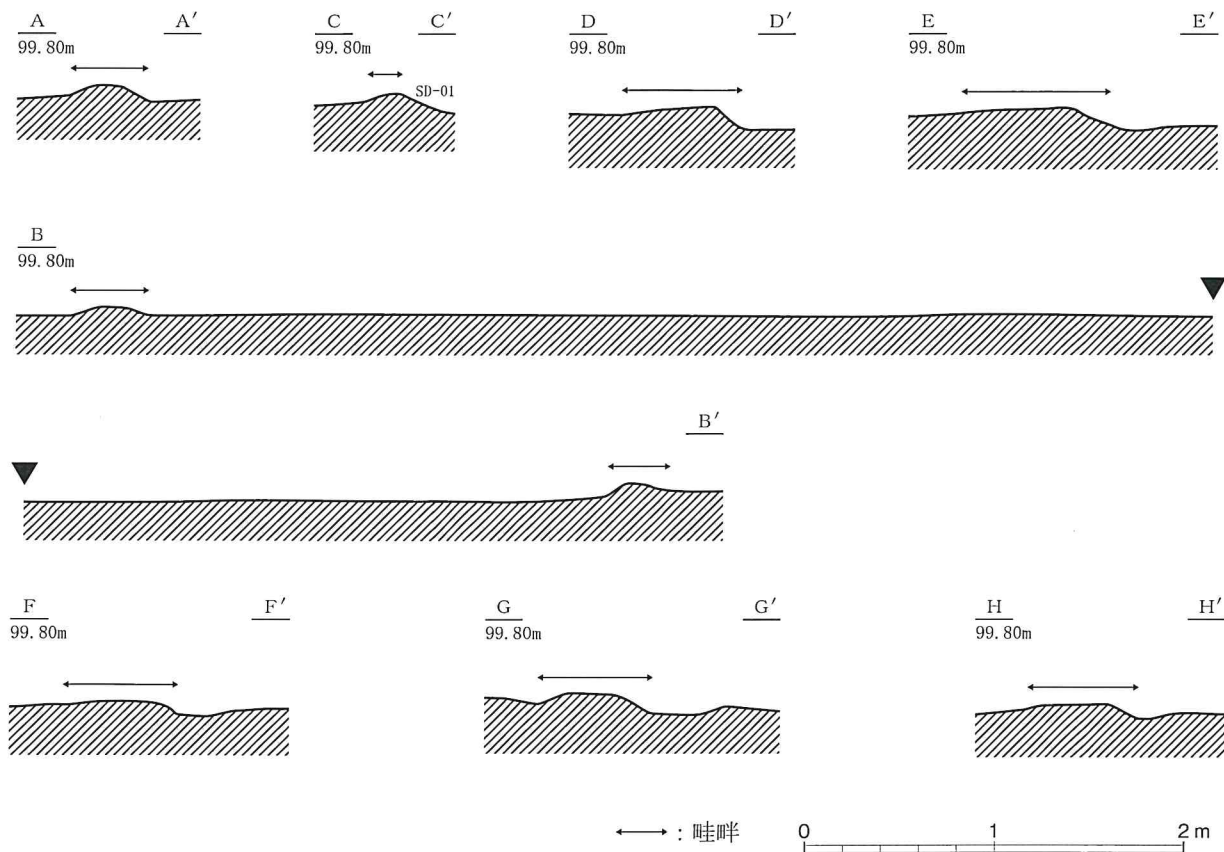


第 14 図 As-B 層下水田跡西側調査区全体図





第 15 図 As-B 層下水田跡東側調査区全体図



第 16 図 As-B 層下水田跡断面図

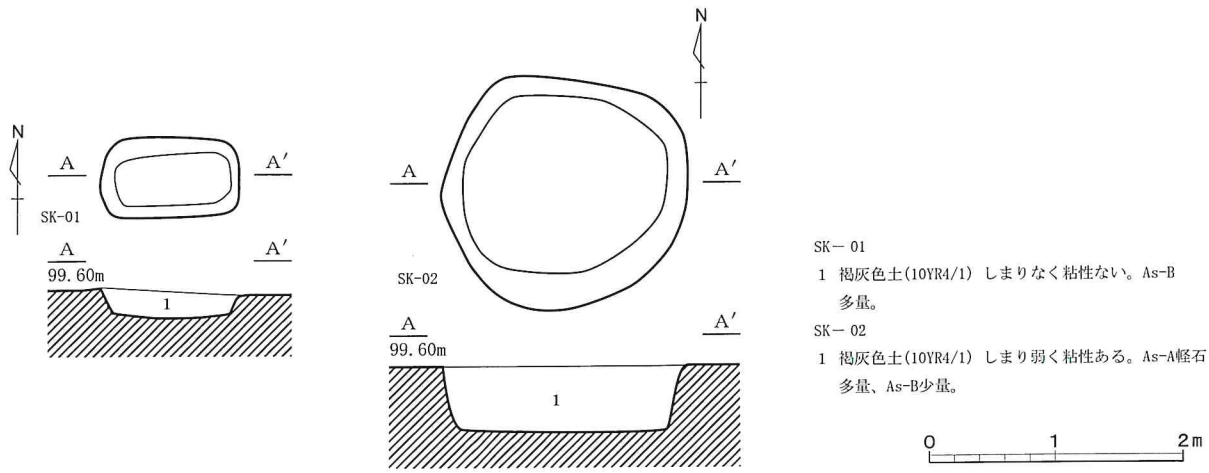
区画 No.	面積 (m <sup>2</sup> )	東 - 西軸 (m)	北 - 南軸 (m)	田面中央標高 (m)	田面比高 (cm)	北-南畦畔高 (cm)	北-南畦畔幅 (cm)	東-西畦畔高 (cm)	東-西畦畔幅 (cm)	備考
1	<13.80>	—	—	99.49	4.1	—	—	—	—	
2	<68.99>	<6.40>	—	99.48	8.3	—	—	5.0 ~ 9.0	41.0 ~ 50.0	
3	<12.39>	<5.52>	—	99.41	2.5	—	—	4.8 ~ 0.8	31.0 ~ 0.40	
4	<8.95>	—	—	99.42	3.6	—	—	—	—	
5	<2.88>	—	<2.90>	99.33	3.9	12.8 ~ 13.9	49.0 ~ 51.0	—	—	
6	<58.42>	<3.45>	—	99.37	5.4	—	—	2.6 ~ 6.0	59.0 ~ 60.0	
7	<45.41>	<1.10>	<17.20>	99.34	3.1	3.3 ~ 7.3	59.0 ~ 62.0	1.2 ~ 3.0	55.0 ~ 60.0	

第 4 表 As-B 層下水田跡計測値

### 3 土坑

2 基の土坑 (SK - 01・02) が検出された。SK - 01 は平面形が隅丸長方形を呈する。埋没土は As-B を多量に含む褐灰色土を基調としていた。As-B 層下水田跡と重複し、切り合い関係から本遺構が新しい。遺物の出土が認められなかったため詳細な時期については不明だが、As-B 降下以降、As-A 降下以前の期間内に帰属するものと考えられる。SK - 02 は平面形が円形を呈する。埋没土は As-A を含んだ褐灰色土を基調とする。SK - 02 についても遺物の出土が認められなかったため詳細な帰属時期は不明であるが、埋没土から As-A 降下以降に帰属するものと考えられる。2 基の土坑について、その用途については不明である。なお、計測値については第 5 表に示した。





第 17 図 土坑遺構図

遺構名	位置	形態		規模	深さ	出土遺物	備考
		平面	断面				
SK-01	X38520 Y-75160	隅丸長方形	逆台形	1.09 × 0.65	0.22	—	
SK-02	X38515 Y-75160・ -75165	円形	逆台形	1.96 × 1.84	0.53	—	

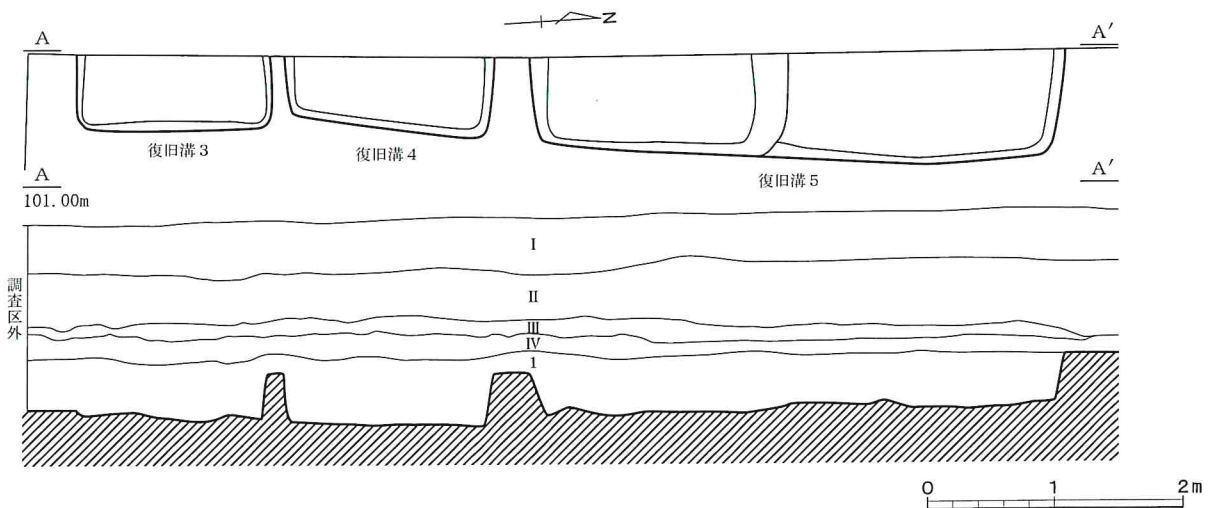
第 5 表 土坑計測値

#### 4 復旧溝

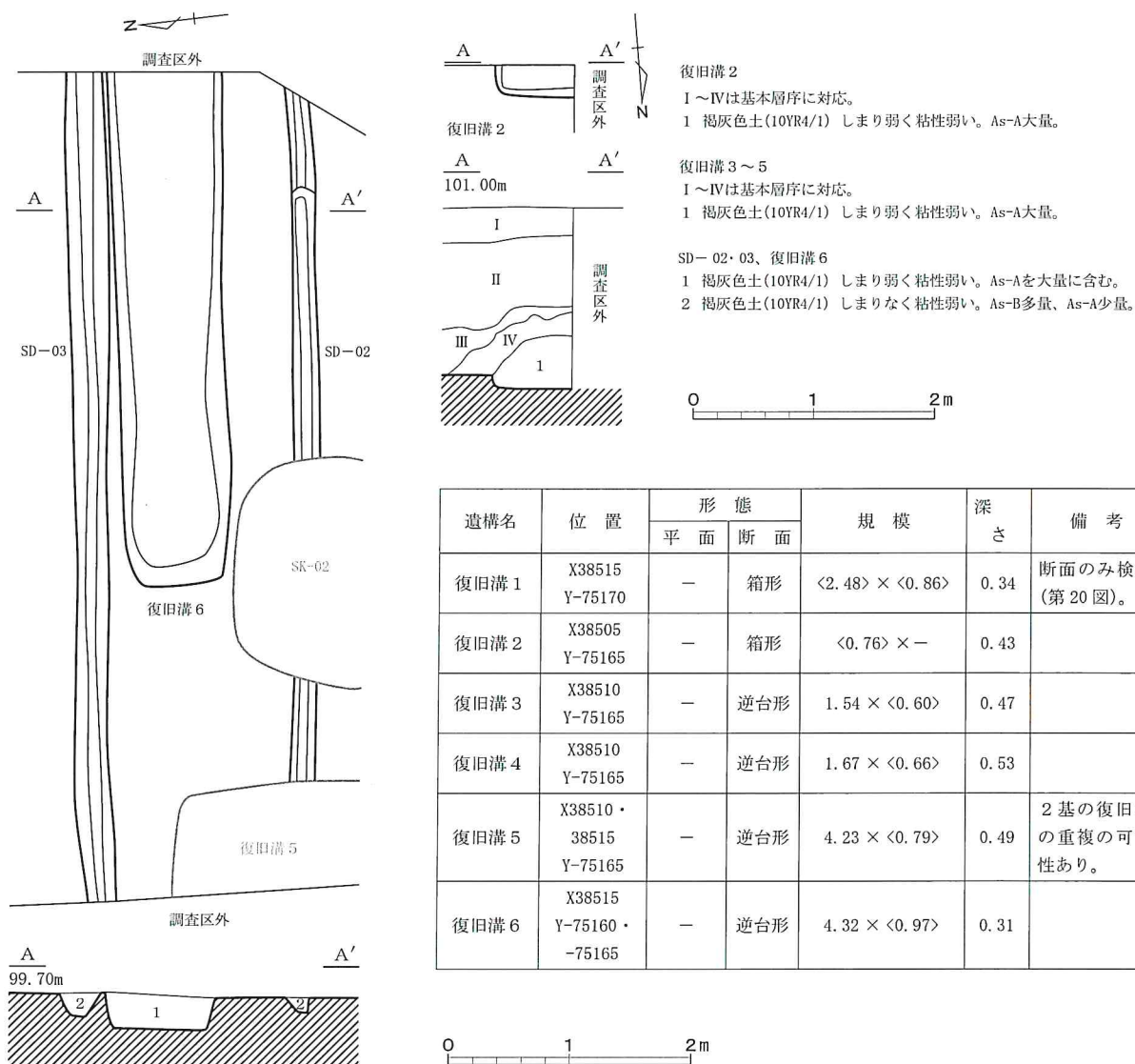
復旧溝 1～6 (第 18・19 図・第 6 表 / PL. 4)

西側調査区南東部、東側調査区南側において As-A の復旧溝と考えられる土坑群が検出された。復旧溝については、「耕地を覆った堆積物をサク状の溝群や連続する土坑群などに埋設処理したものでこれらを総称して復旧溝と呼ばれている」<sup>(1)</sup>とされており、本遺跡において検出された土坑群についても同様の形態を示していると考えられる。復旧溝内には As-A を大量に含んだ土が充填されていた。なお、平成 13 年度に調査した際にも今回検出された復旧溝と同規模・同形態の復旧溝が確認されている。各復旧溝の計測値については第 6 表に示した。

(1) 青木利文 2018 『群馬文化』「玉村町大字福島における天明三年の災害復旧—明治の地引絵図との比較による復旧状況—」群馬地域文化研究協議会



第 18 図 復旧溝 3～5 遺構図



第 19 図 復旧溝 2・6、SD-02・03 遺構図 / 第 6 表 復旧溝計測値

## 5 溝

3 条の溝 (SD-01 ~ 03) が確認された。いずれの溝も埋没土に As-A を含むことから近世以降に帰属するものと思われる。SD-02・03 は併走し、規模も同規模であることから 2 条 1 対で機能していた可能性が考えられる。

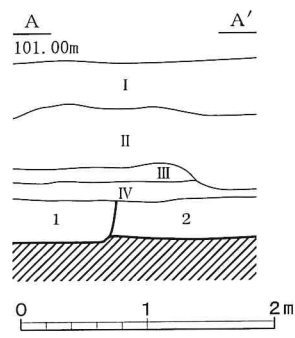
SD-01 (第 20 図 / PL. 4)

**位置** : X38515 ~ 38530、Y-75170。**重複** : As-B 層下水田跡と重複し、切り合い関係から本遺構が新しい。大半が調査区外に範囲が及ぶ。また、カクランによる削平が著しい。**規模・形状** : 上端幅 <1.80 m>、下端幅 <0.98 m>、深さ 0.25 m。断面形状は不明である。**走行方向** : N-2° - E。西側調査区南端部でわずかに西側に走行方向を変える状況が認めらる。**遺構埋没状態** : As-A・砂質土を大量に含む褐色土が堆積していた。**遺物出土状態** : 埋没土中より出土した。**遺物** : 近世陶磁器、須恵器甕。須恵器甕は混入遺物と考えられる。**時期** : 遺構埋没土及び出土遺物から 18 世紀以降に帰属するものと思われる。

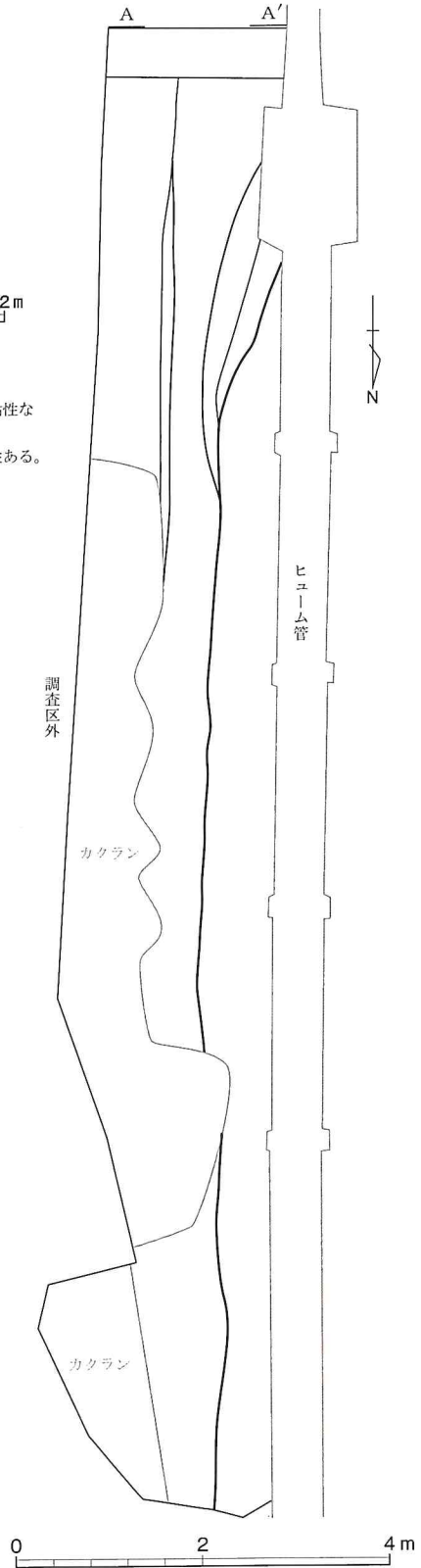
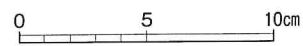
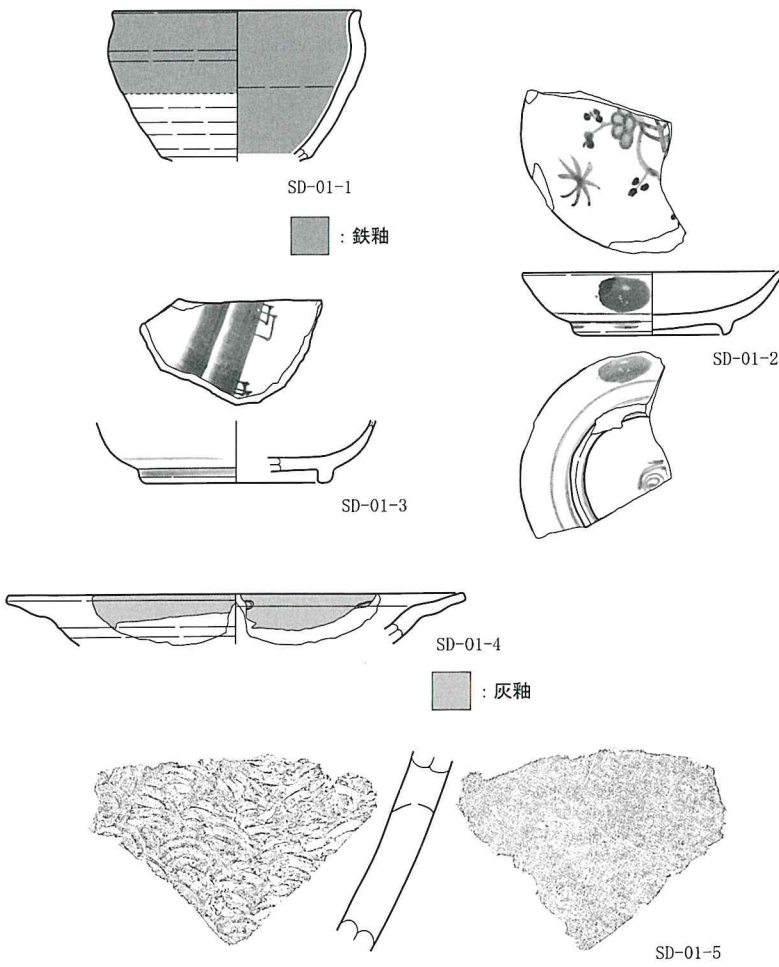


SD - 02 (第 19 図 / PL. 4)

位置 : X38515、Y-75160・75165。重複 : As-B 層下水田跡及び SK - 02 と重複し、切り合い関係から As-B 一次堆積層下水田跡より新しく、SK - 02 より古い。東西端部は調査区外に範囲が及ぶ。  
 規模・形状 : 上端幅 0.22 m、下端幅 0.09 m、深さ 0.15 m。断面形状は逆台形状を呈する。走行方向 : N - 84° - W。遺構埋没状態 : As-A を大量に含む褐灰色土を基調とした土が堆積していた。遺物出土状態 : 遺物は出土しなかった。遺物 : 一。時期 : 埋没土に As-A を含むことから 18 世紀以降と考えられる。



復旧溝 1・SD - 01  
 I ~ IV は基本層序に対応。  
 1 褐灰色土 (10YR4/1) しまりなく粘性ない。As-A 大量。  
 2 褐色土 (10YR4/4) しまりあり粘性ある。As-A・砂質土大量、As-B 少量。



第 20 図 SD - 01 遺構図・遺物実測図

## SD - 03 (第 19 図 / PL. 4)

位置 : X38515、Y-75160・75165。重複 : As-B 層下水田跡と重複し、切り合い関係から本遺構が新しい。また、東西端部は調査区外に範囲が及ぶ。規模・形状 : 上端幅 0.35 m、下端幅 0.13 m、深さ 0.20 m。断面形状は逆台形状を呈する。走行方向 : N - 84° - W。遺構埋没状態 : As-A を大量に含む褐灰色土を基調とした土が堆積していた。遺物出土状態 : 遺物は出土しなかった。遺物 : 一。時期 : 埋没土に As-A を含むことから 18 世紀以降と考えられる。

番号	器種	法量	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	陶器 埴	口径 : (9.9) 底径 : - 器高 : <6.0>	①堅緻 ②胎土 - 灰白、釉薬 - 黒 ③黒色粒・白色粒 ④口縁～体部破片	内外面ロクロ整形。外面体部上位から内面にかけて鉄釉を施す。	瀬戸美濃。 近世。
2	磁器 皿	口径 : (10.2) 底径 : (5.7) 器高 : 2.5	①堅緻 ②内外 - 明緑灰 ④口縁部～底部 1/4 残存	内外面ロクロ整形、削り出し高台。染付。	波佐見。 18 世紀。
3	磁器 皿	口径 : - 底径 : (7.2) 器高 : <2.5>	①堅緻 ②内外 - 灰白 ④底部 1/4 残存	内外面ロクロ整形。削り出し高台。染付。	肥前。 19 世紀。
4	陶器 皿	口径 : (18.1) 底径 : - 器高 : <2.0>	①良好 ②内外 - 淡黄 ③黒色粒 ④口縁部破片	内外面ロクロ整形。内外面に灰釉を施す。内面に円文。	瀬戸美濃。
5	須恵器 甕	口径 : - 底径 : - 器高 : -	①還元焰 ②内 - 灰、外 - 灰白 ③白色粒・黒色粒・チャート ④胴部破片	外面 : 平行タタキ。 内面 : 同心円状の当て具痕。	混入遺物。

第 7 表 SD - 01 遺物観察表

## 6 ピット

17 基のピット (SP - 01 ~ 17) を検出した。いずれのピットからも遺物の出土は認められなかった。埋没土は全てのピットに As-B を含んだ褐灰色土が堆積していた。ピットは東側調査区北側に密集しているが、今回調査した範囲では掘立柱建物跡などを確認するには至らなかった。各ピットの計測値については第 8 表に示した。

遺構名	位置	規模 (長軸・短軸・深さ)	出土遺物
SP-01	X38530、Y-75160	0.20・0.15・0.07	—
SP-02	X38530、Y-75165	0.23・0.21・0.09	—
SP-03	X38530、Y-75165	0.32・0.25・0.22	—
SP-04	X38530、Y-75165	0.21・0.20・0.18	—
SP-05	X38530、Y-75160	0.30・0.28・0.20	—
SP-06	X38530、Y-75160	0.28・0.25・0.22	—
SP-07	X38530、Y-75160	0.20・0.18・0.15	—
SP-08	X38530、Y-75160	0.35・0.25・0.07	—
SP-09	X38530、Y-75160	0.31・0.30・0.13	—
SP-10	X38530、Y-75160	0.30・0.29・0.15	—
SP-11	X38530、Y-75160	0.31・0.25・0.08	—
SP-12	X38525、Y-75160	0.48・0.35・0.10	—
SP-13	X38525、Y-75160	0.51・0.32・0.11	—
SP-14	X38525、Y-75165	<0.50>・0.28・0.07	—
SP-15	X38520、Y-75165	0.59・0.55・0.14	—
SP-16	X38515、Y-75165	0.29・0.25・0.12	—
SP-17	X38515、Y-75165	0.85・0.38・0.14	—

第 8 表 ピット計測値



## VI まとめ

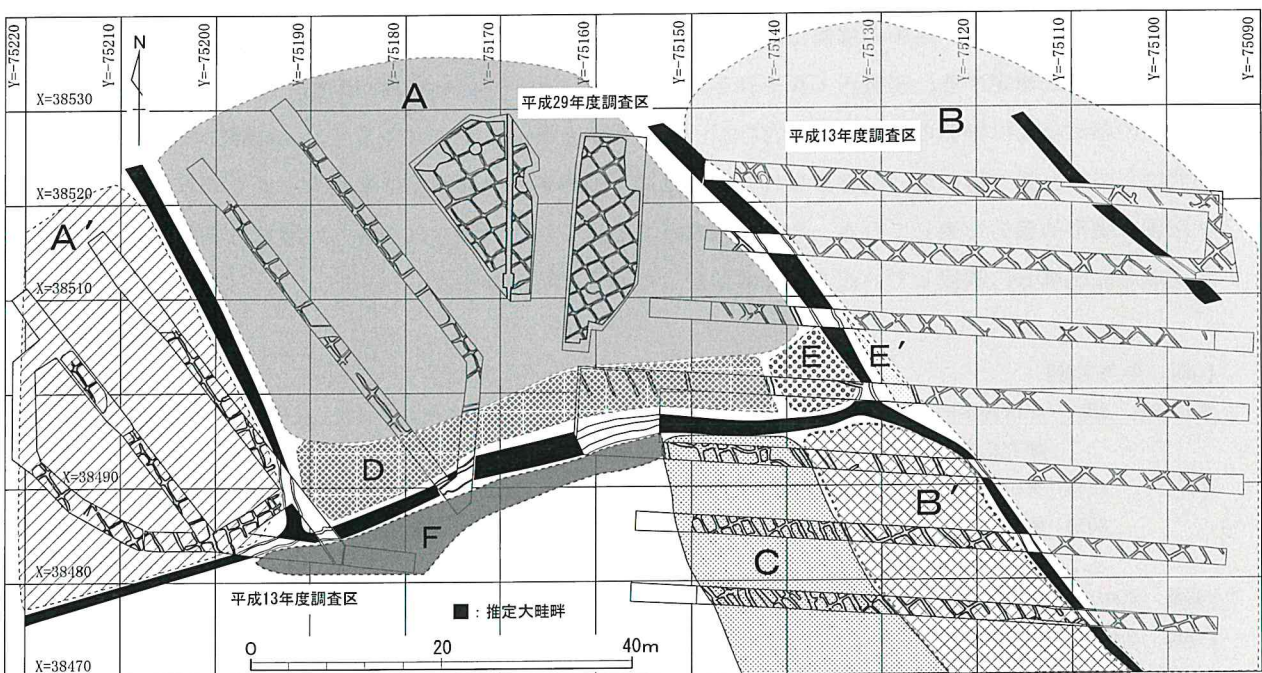
並榎町 I 遺跡 2 では、古墳時代後期 (Hr-FA 泥流層直下) と平安時代末期 (As-B 直下) の水田跡が検出された。ここでは前者の 6 世紀初頭の水田跡について、前回の平成 13 年度調査区と合わせて考察し、まとめとしたい。

本遺跡で検出された Hr-FA 泥流層下水田跡は、当該期水田遺構の特徴をよく表しており、水田面一区画あたりの面積は 2.43 ~ 5.20 m<sup>2</sup> を測る。このようないわゆる「極小区画水田」では、地形の傾斜に合わせて大畦畔を構築し、大畦畔に囲まれた内部に縦横の小畦畔を配置する。小畦畔は一般的に毎年作り変えられたようで、傾斜方向に沿うものが縦アゼとされ、これに直交する横アゼには水口が設置される傾向にある (齋藤 2001)。このことを踏まえた上で、本遺跡の畦畔および水田面の検出状況を観察すると、地点により異なった状態が浮かび上がる。それぞれ、以下のような特徴を挙げることができる (第 21 図)。

A : 隅丸正方形の区画を主体とする区域。畦畔の上面幅がやや狭く、太さが一定でない。A' を含む。本調査区では水田面・畦畔の区別なく、深い人足跡が無数に残されていた。 B : 長方形区画を主体とする区域。畦畔は A と比較して上面幅が広く、直線的で、整備された印象を受ける。B' を含む。 C : 短冊状区画を主体とする区域。A・B と比べて区画の幅が明らかに狭い。畦畔の遺存状態は B と同様に良好である。窪み状のわずかな谷地形もしくは北東-南西方向の緩傾斜面と推測される。 D : 横方向大畦畔の北脇で、縦方向の小畦畔のみがある区域。小畦畔は大畦畔に接続しない。 E : 縦方向大畦畔の脇で、小畦畔が検出されない縦長の区域。 E' を含む。 F : 横方向大畦畔の南脇で、広い範囲で小畦畔が認められない区域。

上記の各区域について、Hr-FA 泥流被覆前の農作業状態や機能を先行研究に照らして検討する。Hr-FA の降灰時季については、現在の農事暦との比較検討から、田植え前の初夏とする見方が多い (坂口 2013)。また、Hr-FA 下水田における農作業段階とそれを表す水田面の状態は、以下の 4 例が示されている (坂口 1993)。

- ① : 小畦畔が縦・横ともあり、水田面が荒れている。前年度のアゼが残っており、田起こし前の状態。
- ② : 小畦畔はなく、無数の深い足跡を残す。代掻きを想定させる状態。



第 21 図 Hr-FA 泥流層下水田跡区分図

③：小畦畔は平行する一方向のみあり、これに沿って足跡が存在する。畦畔作りの途中の状態。

④：小畦畔が縦・横ともにあり、アゼを避けるかのような足跡を残す。畦畔が完成した状態。

これらを基に各区域の作業段階を推測すると、本調査区を含む区域Aについては、①の田起こし前に該当する可能性がある。縦・横の小畦畔は全域に確認できるものの、幅や高さは一定でなく、アゼの肩にあたる部分はなだらかである。田起こし前の水田面の事例として、芦田貝戸Ⅲ遺跡5区の一部範囲が挙げられる(高崎市教委1994)。小畦畔は上幅10～30cm、下幅30～45cm、高さは10cm以下のものが多く、本遺跡の畦畔と近似した状況を呈している。ただし、今回の調査区では非常に多数の足跡を検出している。高さのある畦畔も踏まれており、畦畔を避ける様子は確認されない。向いている方角は様々で、足跡同士の重複例も多いため歩行列を見いだすことは難しいが、複数の人間が区域Aを縦横無尽に歩行した様子が想定できる。

留意すべき点は、多くの足跡が深く明瞭に残されていることで、水田面は耕起前ながらも水分を含んだ軟弱な状態であったと考えられる。区域Aを休耕田あるいは耕作を一時的に放棄した範囲と仮定した場合、周辺で行われる代掻きに合わせ、区域Aでも土質維持管理のため水を張っていた可能性がある。また、代掻き後に余剰な水分を排水し小畦畔作りを行っていたと仮定すると、より上位に位置する他区域からの排水が流入したことも考えられる。水田面に滞水した雨水が耕作土を軟弱化させていた可能性もあり、現時点では詳しい状況を特定するに至らない。

本遺跡のようなHr-FA泥流層下水田跡では、耕作土にHr-FAを鋤きこんで水田の復旧を試みた作業の痕跡が認められる事例もある。今回の調査区ではHr-FAの一次堆積層は検出できず、降灰直後の状況は不明である。

区域Aとは対照的に、区域Bは④の畦畔が完成した状態であると推測する。区域Cは、報告書掲載写真から判断すると、泥流層が堆積した凹凸はほとんど認められず、畦畔は最も高く遺存しているため、④の畦畔が完成した状態であると推定する。

区域Dは、区域Aの排水が関与する地点であろう。区域Eは、区域A・B両方の用水・排水が関わる地点であると推測する。本遺跡の調査では明確な用水路を確認できていない。未調査区域が広いため断定はできないが、掛け流しを原則とすれば、大畦畔脇の長大な区画や幅広い区画が用排水路機能を兼ね備えていた可能性もある。区域Fは、区画の端部に該当し、区域Cおよび南側未調査区域に展開する水田へ給水するための溜池状施設と想定する。区域A・Bそれぞれの北西側にも、同様の施設が存在するものと予測する。

以上の検討作業は推測の部分を多く含むが、総括すると次のことが言えよう。大畦畔を境界として小区画形状に正方形と長方形の違いが認められ、これは前年か当年かの時間差に起因するようであり、幅狭の短冊状区画は地形的制約を表している。今回の調査区で多数の足跡が残された詳しい理由は不明ながら、小畦畔が完成した区域Bに隣接していることには留意しておく必要がある。

#### 【引用・参考文献】

齋藤英敏 2001「小区画水田・極小区画水田の構造 —群馬の水田跡から見た古代東アジア—」

『研究紀要』19 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂口 一 1993「火山噴火の年代と季節の推定法」『火山灰考古学』古今書院

2013「榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA)・榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)およびそれらに起因する火山泥流の堆積時間と季節に関する考古学的検討」『第四紀研究』第52巻 第4号

『新編 高崎市史 通史編1 原始古代』2003 高崎市市史編さん委員会

『新編 高崎市史 資料編2 原始古代II』2000 高崎市市史編さん委員会

『並榎町I遺跡』2002 高崎市遺跡調査会

『浜川芦田貝戸遺跡III』1994 高崎市教育委員会



# 写真図版



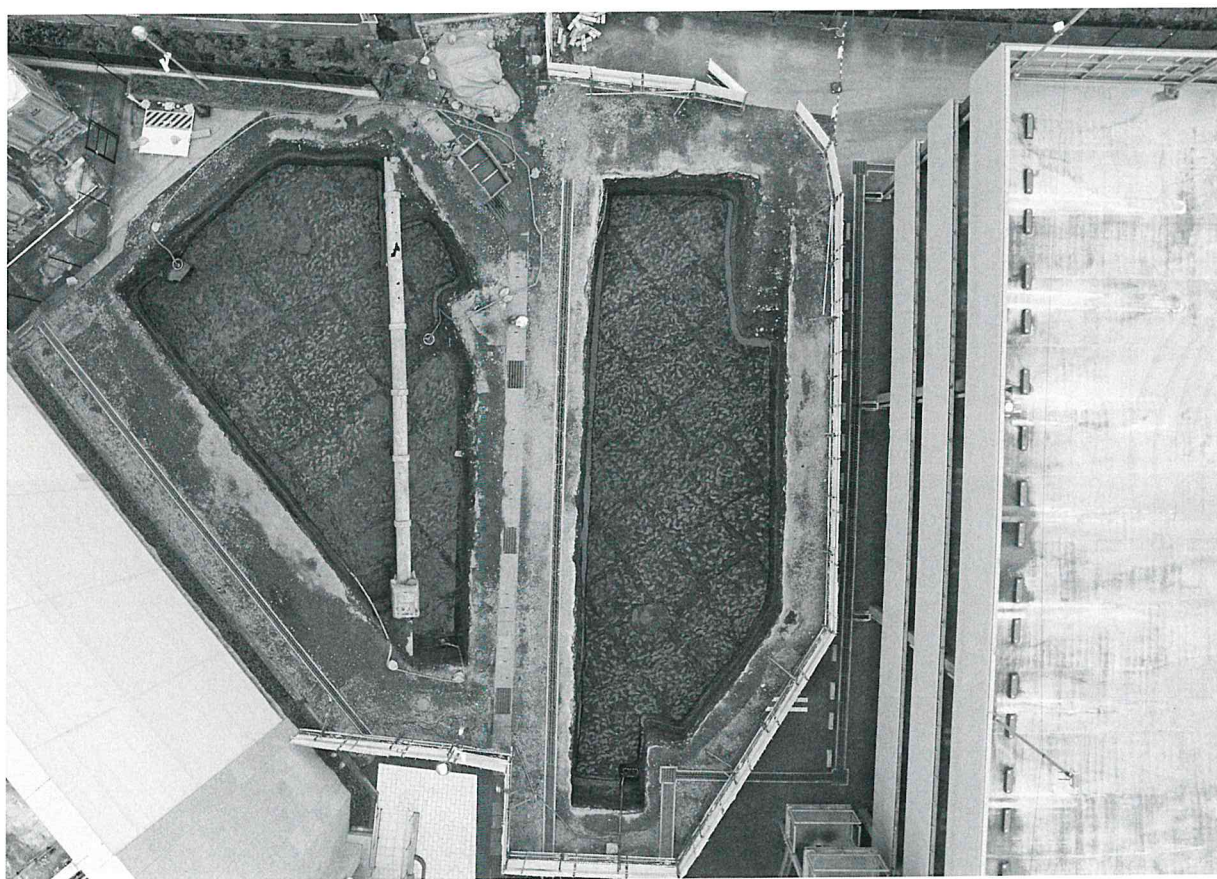
Hr-FA 泥流層下水田跡作業風景







調査区遠景（東から）



Hr-FA 泥流層下水田跡全景（上が北）





西側調査区 Hr-FA 泥流層下水田跡近景（北西から）



東側調査区 Hr-FA 泥流層下水田跡近景（北西から）



Hr-FA 泥流層下水田跡水口 2（南西から）



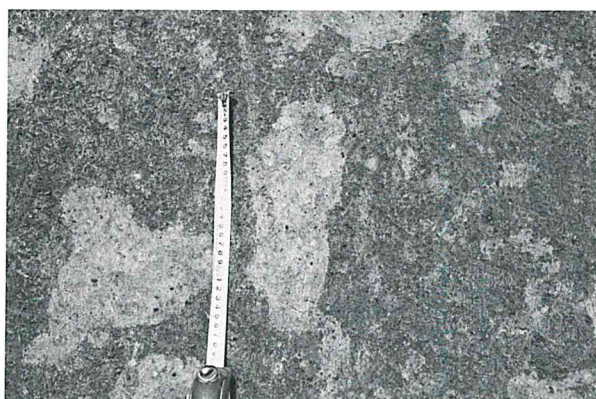
Hr-FA 泥流層下水田跡水口 4（南西から）



Hr-FA 泥流層下水田跡畦畔検出状態（北東から）



Hr-FA 泥流層下水田跡畦畔検出状態（北から）

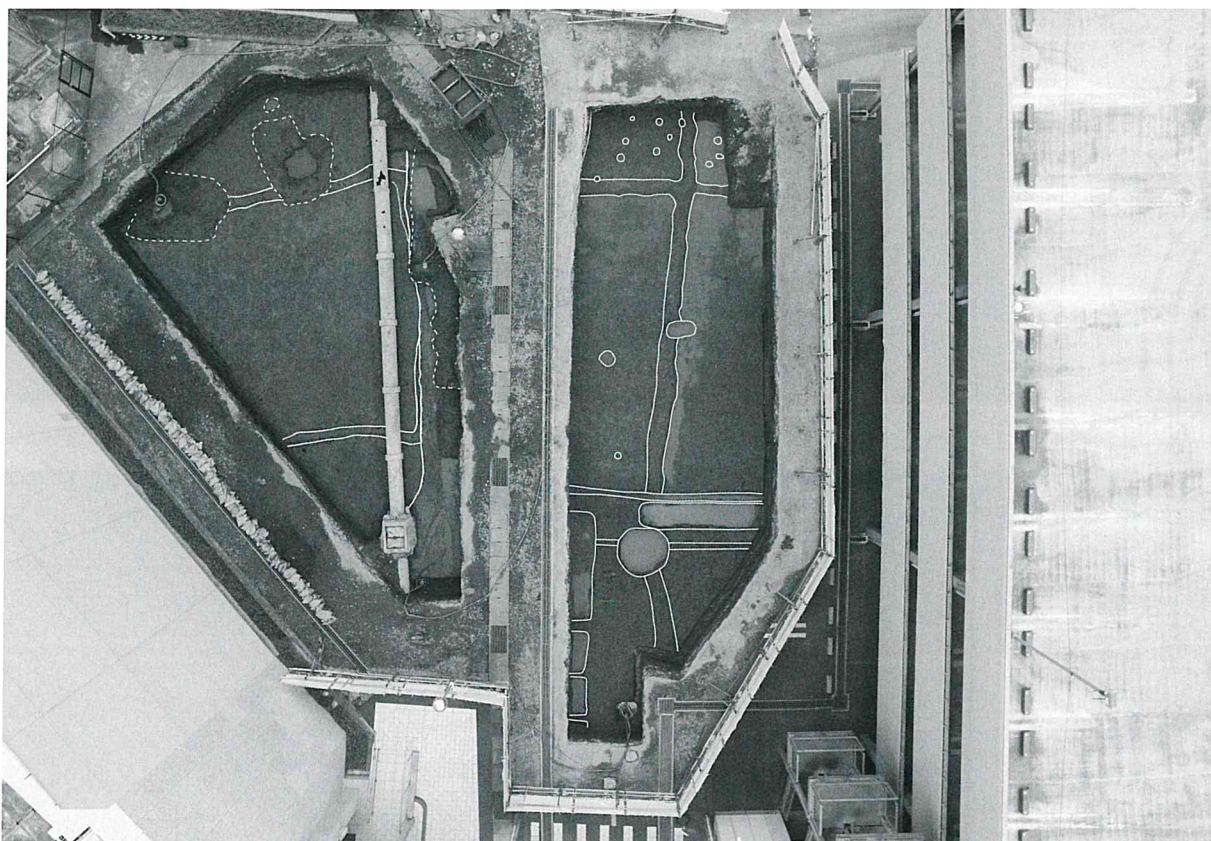


Hr-FA 泥流層下水田跡足跡検出状態（北から）

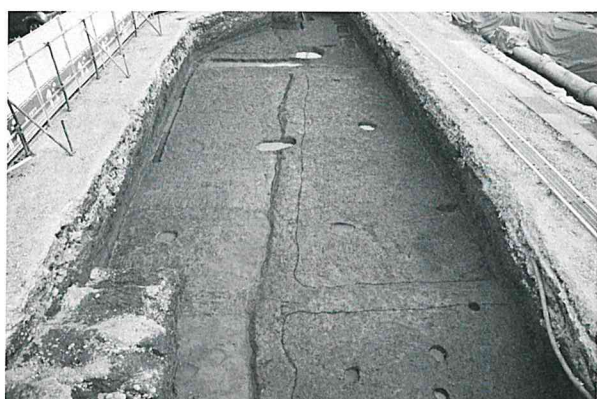


Hr-FA 泥流層下水田跡足跡検出状態（南西から）





As-B 下水田跡全景 (南から)



As-B 下水田跡畦畔検出状態 (北から)



As-B 下水田跡畦畔検出状態 (北東から)



SK - 01 全景 (南から)

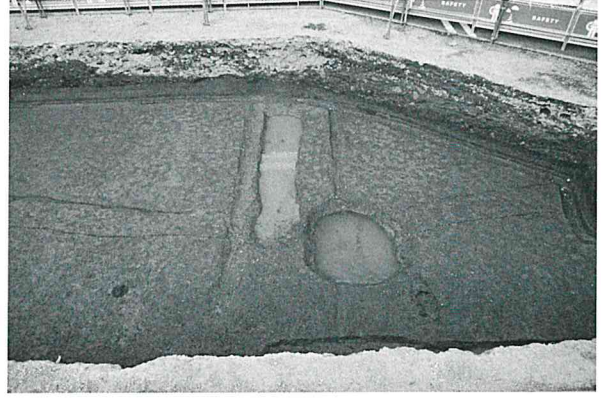


復旧溝 1 土層断面 (西から)





復旧溝 2～5 全景 (南東から)



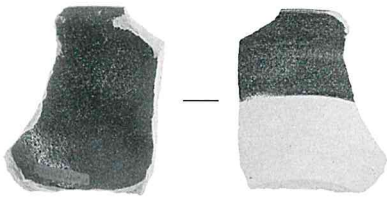
SK-02、復旧溝 6、SD-02・03 全景 (西から)



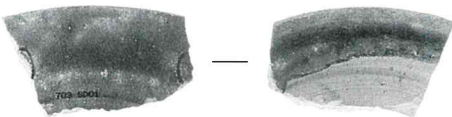
SD-01 全景 (南から)



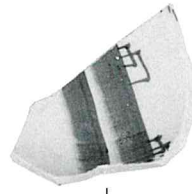
東側調査区北部ピット群全景 (西から)



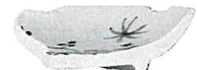
SD-01-1



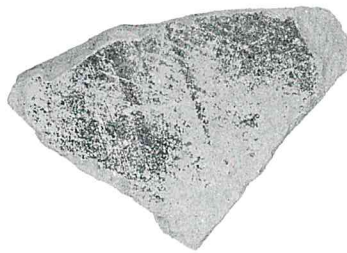
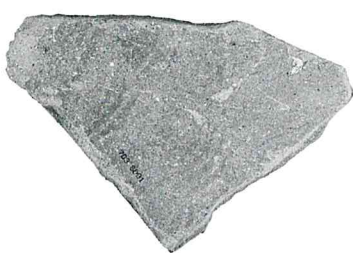
SD-01-4



SD-01-3



SD-01-2



SD-01-5

SD-01 出土遺物



## 報告書抄録

フリガナ	ナミエマチイチイセキニ		
書名	並榎町 I 遺跡 2		
副書名	店舗増築に伴う埋蔵文化財発掘調査		
巻次			
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第 405 集		
編著者名	矢島浩 伊藤順一 山本杏子		
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒 379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1      Tel. 027-265-1804		
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所		
発行年月日	平成 30 年 3 月 20 日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
なみえまちいちいせきに 並榎町 I 遺跡 2	群馬県高崎市並 榎町 44 番地 1 外	102020	703	36° 20' 39"	138° 59' 45"	20170718 ～ 20170930	652.23 m <sup>2</sup>	店舗増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
並榎町 I 遺跡 2	生産	古墳時代 平安時代 近 世	Hr-FA 泥流層下水田跡 As-B 層下水田跡 土 坑            2 基 復旧溝           6 基 溝                3 条 ピット            17 基	須恵器 陶 器 磁 器	Hr-FA 泥流層下水田跡にて多 数の人間の足跡を検出。

高崎市文化財調査報告書第 405 集

## 並榎町 I 遺跡 2

—店舗増築に伴う埋蔵文化財発掘調査—

---

平成 30 年 3 月 13 日印刷

平成 30 年 3 月 20 日発行

編集 / 有限会社毛野考古学研究所  
発行 / 有限会社毛野考古学研究所  
印刷 / 朝日印刷工業株式会社

---





